

Title	ロシア語のヴォイス : 受身表現を中心に
Author(s)	人見, 友章
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61832
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

博 士 論 文

題目 ロシア語のヴォイス
——受身表現を中心に——

提出年月 2016年12月

言語文化研究科 言語社会専攻

氏名 人見 友章

要旨

ロシア語のヴォイス

——受身表現を中心に——

人見 友章

本論は、人間とことばがどのように関係しているのかを、世界の多くの言語で観察されるヴォイスという具体的な言語現象の中で考察している。特にヴォイスのなかでも典型的な体系とされる受身文に焦点をあてて、人間がどういう判断基準で可能な複数の表現形式から一つを選択するのかということを明らかにしていく。具体的には、能動態と受動態の対立が普遍的な概念ではないということと、従来形態的に能動態のカテゴリーとして分類されてきたロシア語の不定人称文という構文が受身表現を担うということの問題意識をもって、まずは歴史的な観点から受身文を考察していく。これは、ことばというものが人間が活動していくなかで刻一刻と変化していくものであり、その変化過程を明らかにすることは取りも直さず人間の表現形式の選択条件を明らかにすることにつながると思われるからである。そしてそれを基にして、現代ロシア語の受身文を実際の言語資料を分析対象として、古代ロシア語から現代ロシア語への使用状況の変遷をみていく。

本論では、現代ロシア語の受身文の考察に際して、実際に使用されているテキスト、すなわち現代ロシア語文学作品を分析対象にした。分析対象として現実にあるテキストを使用した理由としては、先行研究において具体的に言語資料を分析したものは林田（1999, 2000, 2001, 2011, 2013）しかないという事実である。もう一つは、先行研究で指摘されている情報と実際の運用状況の中で起こっている一致点やずれを観察したいためである。さらには、ロシア語の受身文をアスペクトの観点から考察しその意味を確定する場合には、複数のまとまった文の中で観察することが必要不可欠であり、大量にまとまった数を収集できるという点でも、現代ロシア語文学作品を分析対象とした。ただ、文学作品のテキストを考察対象にするときには、その作品の作家特有の文体的特徴が使用されている場合も考えられるため、特定の作家に偏らないように注意した。また、ある程度認められた作家の作品を収集するために、日本語に翻訳されている作品に限定した。

論文は、二部、六章の構成となっている

第Ⅰ部「序論」では、ヴォイス理論とディアテシス理論を先行研究に全面的に依拠して考察を行っている。さらには、研究の目的・方法、および論文の構成を述べている。

第1章では、ヴォイスの基本的な考え方と普遍的な概念とされるディアテシスという新しい理論を先行研究に基づき整理している。そのなかで、ヴォイスを定義することの難しさ、能動態と受動態の対立が普遍的な事実ではないということを主張した。またディアテシスの理論の考察において、受身文の普遍的な特徴とは、能動文に特有の「主体—主語」の対応関係が崩され、主体が主語の位置を占めないような文であるとした。そのうえで、伝統的に「不定人称文」、「無人称文」と呼ばれている構文の一部が、フラコフスキーの受身文の定義に従えば、受身文に分類されることになるということを主張した。

第2章では、研究の目的・方法、および論文の構成を述べている。

第Ⅱ部「ロシア語の受身表現」では、ヴォイスの典型的な体系とされる受身文にスポットをあてて、ロシア語という具体的な言語の中で考察を行っている。

第3章では、歴史的な観点から受動態の起源、歴史的な変遷過程をまとめている。特に第1章でみた事実の根拠となるものを、受動態の起源、歴史的な変遷過程のなかで探っている。そのなかで、受動態の起源は中動態であり、分詞形も元々は状態指標からスタートしたものであり、ヴォイス・カテゴリーとは無関係な指標であったということを述べた。そして、ヴォイスという概念は単なる能動態と受動態の対立として捉えるものではなく、能動態—中動態—受動態という連続線によって理解されるべきものであるということを主張した。

第4章では、ロシア語の受身文研究のこれまでの流れを振り返っている。代表的な先行研究としては、Шахматов (1941), Исаченко (1960), Comrie (1976), Русская грамматика (1980), Князев (1983), Маслов (1983, 1984, 2001), Недялков, Яхонтов (1983), Шелякин (1989), Пупынин (1991), Храковский (1991), 林田 (1999, 2000, 2001, 2011, 2013), Падучева (2004) が挙げられるが、それらの研究では概ね受身文とアスペクトとの相関性が議論されてきた。特に受動過去分詞から作られる分詞形受動文がパーフェクトと非常に強い相関性が見られることを述べた。

第5章、第6章では、ロシア語の受身文のアスペクト的意味・機能を現実にある言語資料を分析することで検証している。ここでは言語資料にあたることで、先行研究で指摘されている理論と実際の使用状況の中で起こっている一致点・ずれを観察している。

第5章では、ロシア語の分詞形受動文について考察を行っている。分詞形受動文の動作主項に注目すると、動作主項に表示されているものの多くが事物名詞であり、本来の意味での動作主ではないということがわかった。また、アスペクト別に頻度をとると、状態パーフェクトの使用が多く観察された。以上の事実から、分詞形受動文は現代ロシア語においても状態指標を表す形式として使用されると結論付けた。さらに、これまでほとんど考察されてこなかったアオリスト受動文と同じ機能をもつ不定人称文の差異化原理を試みている。その中で、2つの構文の決定的な差異は、不定人称文が「外からの人為的な働きかけが非常に強い」という意味が前面に出て「否応なしに、無理矢理、一方的に」が含意されるのに対して、アオリスト受動文の方はこのような意味を弱める働きをもつということを主張した。そして、アオリスト受動文にはテキストレベルでの結束性の維持や有標語順における主題交替現象が観察されるのに対して、不定人称文ではそのような現象は見られず、唯一VO語順タイプで直接目的語がヒト名詞の場合に限り、一時的な主題交替現象が起こるのみであるとした。

第6章では、ロシア語の再帰形受動文について考察を行っている。再帰形受動文の動作主項に注目すると、動作主項はほとんど表示されず、表示されたとしても事物名詞が頻度として多くなり、本来の意味での動作主ではないということがわかった。また、再帰形受動文のアスペクト意味・機能の先行研究に基づいた分析から、その使用動機には、まず意志性の排除ということが大きく関わっており、意志性を排除するということは、とりもなおさず動作主による動作性のイメージをなくすことにつながり、そのことがまさに再帰構文の受身用法の判定の揺れにつながっているということがわかった。また再帰形受動文の多くがモダリティー表現として使用されるという事実は、もうそこにはすでに動作主は一切関与していないといえ、したがって、再帰形受動文は受動カテゴリーを未だ形成していないと結論付けた。動作主項がほとんど表示されず、されたとしても本来の意味での動作主ではないという事実もまた、再帰形受動文が現代ロシア語においても受動表現として機能していないという裏付けである。

Резюме

Залог в русском языке

— на основе форм выражения пассивной перспективы —

ХИТОМИ Томоаки

Данная диссертационная работа посвящена проблеме залога в русском языке. Целью исследования является раскрытие различия между активом и пассивом. Указанная цель определила необходимость постановки и решения следующих задач исследования:

- Описать протекание исследования по залогу и диатезе в русском языке,
- Определить структурные и функциональные основы причастий и возвратных форм глагола в процессе историко-типологической перестройки структуры языка,
- Описать протекание исследования по причастным пассивным конструкциям и пассивным конструкциям, формируемым возвратными глаголами в русском языке,
- Проанализировать материал причастных пассивных конструкций в русском языке,
- Проанализировать причастные пассивные конструкции и неопределенно-личную конструкцию, которые выражают аористическое значение, с помощью современной русской литературы.
- Проанализировать материал пассивных конструкций, формируемых возвратными глаголами в русском языке

Структура работы определяется ее задачами. Диссертация состоит из введения, шести глав, списка литературы и материалов.

ロシア語のヴォイス
——受身表現を中心に——

目次

はしがき

第 I 部 序論	3
第 1 章 ヴォイスとは	4
1.1 ヴォイスとは	5
1.2 ディアテシスとは	7
1.3 まとめ	18
第 2 章 研究の目的・方法および概要	14
2.1 研究の目的	14
2.2 研究の方法	14
2.3 論文の構成	15
第 II 部 ロシア語の受身表現	16
第 3 章 受動態の起源	17
3.1 受動態の起源	17
3.2 分詞形の起源	19
第 4 章 ロシア語の受身文に関する研究	21
4.1 ロシア語受身文のAspect意味研究	22
4.1.1 Шахматов (1941)	22
4.1.2 Исаченко (1960)	23
4.1.3 Comrie (1976)	25
4.1.4 Маслов (1983, 1984, 2001)	27
4.1.5 Шелякин (1989)	30
4.1.6 Пупынин (1991)	30
4.1.7 Храковский (1991)	31

4.1.8 林田 (2001, 2011, 2013)	30
4.2 まとめと残された課題.....	33
第5章 現代ロシア語の分詞形受動文の諸機能	35
5.1 分詞形受動文のデータ収集, 方法.....	35
5.2 分詞形受動文の動作主項	36
5.2.1 動作主項データ	36
5.2.2 受動文主語－ヒト, 動作主項－事物.....	38
5.2.3 受動文主語－事物, 動作主項－事物.....	39
5.2.4 受動文主語－ヒト, 事物, 動作主項－ヒト	41
5.3 分詞形受動文のアスペクト的意味・機能	42
5.3.1 アスペクトデータ	42
5.3.2 状態パーフェクト	43
5.3.3 動作パーフェクト	45
5.3.4 アオリスト	47
5.4 分詞形受動文と不定人称文の差異化原理	49
5.4.1 不定人称文の形態・統語的特徴及び潜在的動作主について	50
5.4.2 分詞形受動文のアオリスト用法	52
5.4.2.1 主題の一貫性.....	52
5.4.2.2 結束性	54
5.4.2.3 主題化機能.....	57
5.4.2.4 その他の機能.....	59
5.4.3 不定人称文のアオリスト用法	61
5.4.3.1 人為的な外的作用	61
5.4.3.2 アオリスト受動文との比較.....	64
5.4.3.3 その他の機能.....	67
5.4.4 まとめ.....	68
第6章 現代ロシア語の再帰形受動文の諸機能	69
6.1 再帰形受動文のデータ収集, 方法.....	69
6.2 再帰形受動文の動作主項	71
6.2.1 動作主項データ	71
6.2.2 受動文主語－事物, 動作主項－事物.....	72
6.2.3 受動文主語－事物, 動作主項－ヒト.....	73

6.3 再帰形受動文のアスペクト意味・機能	75
6.3.1 習慣的事実, 恒常的状态, 属性表示	75
6.3.2 現実的持続	76
6.3.3 モダリティー表現	77
6.3.4 まとめ	78
参考文献	79
例文出典	83

はしがき

本論は、世界の多くの言語で観察されるヴォイスという言語現象を、ロシア語という個別的な言語の中で考察している。

ヴォイスは、アスペクトとならび、人間が使用することばの特徴を端的に表す重要なカテゴリーの一つである。人間がある状況・出来事をことばで言い表すとき、その時の自分の置かれた状況やことばで表現しようとしている事柄に対するその時の自分の態度に合わせて、可能な複数の表現形式から一つを選択している。しかしながら、その選択という行為は無意識に行われることが多い。書き言葉ではどのような表現形式を使うのかを意識することもあろうが、現実のやりとりの場面でそのようなことを意識する人はほとんどいないだろう。これまでの自分の経験と知識で瞬時に数ある表現形式の中から選び取っているのである。そうではあっても、実際に人間はどういう基準で複数の表現形式から一つを選ぶのかという疑問が湧いてくる。これが本論執筆の動機の一つである。

もう一つの動機は、これまでのロシア語の語学研究ではヴォイスよりもアスペクトに重きが置かれてきたという事実にある。ロシア語のアスペクト研究は、言うまでもなくマスロフ（Ю.С. Маслов）をはじめとしてすでに多くの研究資料がある。一方、ヴォイスに関する先行研究はアスペクト研究と比較すると少なく、その研究内容も発展途上の段階といえる。Падучева（2004: 495）も指摘しているが、ロシア語学におけるヴォイス研究はアスペクト研究に比べ軽視されてきたのである。例えば、ロシア語の規範文法書とされる1980年のアカデミー文法（Русская грамматика 1980）のヴォイスに関する項目を見てみると、ヴォイスの定義づけ、その典型的な体系である受身文の形態的・統語的特徴づけ、および他動詞／非他動詞の分類が簡単に記述されているだけであり（Русская грамматика 1980: § 1455-§ 1471）、残念ながら日本語で書かれたロシア語の文法書と内容・質ともにほとんど変わらないのが現状である。

ところで、本論の題目「ロシア語のヴォイス——受身表現を中心に——」について若干触れておきたい。本論は、題目にもあるように、ヴォイスの中でも最も典型的な体系とされる受身表現を中心に考察している。なぜ「受動」ではなく「受身」なのか、またなぜ「表現」ということばを使っているのかという疑問をもたれるかもしれないが、これには本論におけるヴォイスに対する問題意識が隠されている。印欧語から生まれた「受動」という用語は「能動」に対立するものとして捉えられたものであり、そこには能動と受動が一对

のものとして、換言すれば表裏一体のものとして考えられている。筆者はこのような考え方に異議を唱えたい。ロシア語の受動態には専用形式が用意されているが、ロシア語には形態的に能動態のカテゴリーに含まれる「不定人称文」という構文を発達させており、しばしば受身表現の代用として使用され、この場合には能動と受動の対立は成立しえないからである。本論には、「受動態が存在する言語であっても常に能動と受動の対立が起こるわけではない」という考え方が根底にある。

第Ⅰ部「序論」第1章では、ヴォイスの基本的な考え方と普遍的な概念とされるディアテシスという新しい理論を先行研究に基づき整理している。第2章では、研究の目的・方法、および論文の構成を述べている。第Ⅱ部「ロシア語の受身表現」では、ヴォイスの典型的な体系とされる受身文にスポットをあてて、ロシア語という具体的な言語の中で考察を行っている。第3章では、通時的な観点から受動態の起源、歴史的な変遷過程をまとめている。第4章では、ロシア語の受身文研究のこれまでの流れを振り返っている。代表的な先行研究としては、Шахматов (1941), Исаченко (1960), Comrie (1976), Русская грамматика (1980), Князев (1983), Маслов (1983, 1984, 2001), Неद्याлков, Яхонтов (1983), Шелякин (1989), Пупынин (1991), Храковский (1991), 林田 (1999, 2000, 2001, 2011, 2013), Падучева (2004) が挙げられるが、それらの研究では概ね受身文とアスペクトとの相関性が議論されてきた。第5章、第6章では、ロシア語の受身文のアスペクト的意味・機能を現実にある言語資料を分析することで検証している。ここでは言語資料にあたることで、先行研究で指摘されている理論と実際の使用状況の中で起こっている一致点・ずれを観察している。

第 I 部

序 論

第1章 ヴォイスとは

我々人間がある状況・出来事をことばで言い表すとき、その時々状況に合わせて様々な文が選択される。例えば、太郎という人物が花子という人物を殺したという出来事を想定してみよう。この出来事をことばで表現するとき、少なくとも次の二つの表現形式が挙げられる。

- (1) 太郎が花子を殺した。
- (2) 花子が太郎に殺された。

(1)と(2)は言語外事実としては同じ状況・出来事を表している。(1)は動作主である太郎に焦点をあて、動作主の運動として捉えた典型的な他動詞文の例である。一方、(2)は(1)に対応する受身文¹で、動作対象の花子を焦点化し、花子よりの視点²から花子の身に何が起こったかを述べている文である。さらにもう一つ例をみてみよう。動作対象をヒトではなくモノにかえて、太郎が窓を壊したという出来事を表現する場合には、少なくとも次の三つの表現形式が挙げられる。

- (3) 太郎が窓を壊した。
- (4) 窓が太郎に壊された。
- (5) 窓が壊れた。

1 このタイプの受身文は、日本語学では「直接受身文」と呼ばれている。この他に日本語受身文の特有の現象として、間接的に影響を被るものを主語にたてる「間接受身文」のタイプもある。日本語における受身文は「被影響 (affectedness)」を述べるために使用されるといわれている。

2 高見 (2011) には、話し手の視点規則として、「話し手は一般に、自分に近い、親しみのある人や物寄りに自分の視点を置き、それを文の主語 (または主題) にして当該事象を述べる」(高見 2011: 15) ということが挙げられており、「受け身文は、対応する能動文 (一般に他動詞) の目的語に話し手が自分の視点を寄せる文である」(高見 2011: 18) ということが指摘されている。

(3) は (1) と同様に他動詞文であり、(4) は (3) に対応する受身文である。(5) はいわゆる自動詞文と呼ばれる構文で、動作対象の窓が焦点化され、動作主のイメージなしに窓に何が起こったかを述べている文である。このように、人間がある一つの状況・出来事をことばで表現するときには、どこに視点を置くかによって選択される表現形式が異なってくるのである。すなわち、同一の言語外事実が複数の表現形式で示されるとき、その表現形式の差異を表すのが「ヴォイス (voice, залог)³」と呼ばれている。

1.1 ヴォイスとは

ヴォイスは、印欧諸語など世界の多くの言語で観察される現象であるが、実はヴォイスを一義的に定義することは非常に難しい。そもそもヴォイスの体系にどのような現象を含めるのかはそれぞれの言語で大きく異なっており、一つの言語の中でも研究者によって見解はばらばらである。ヴォイスは形態的カテゴリーであるのか、それとも統語的カテゴリーであるのか、はたまた両方にまたがるカテゴリーであるのか。とりあえずヴォイス・カテゴリーそのものの存在は認めるとしても、次にその体系にどのような態を区別するのかという問題が出てくる。

ヴォイスの体系に確実に含まれるのは能動態であり、それ以外には候補として受動態、中間態、再帰態、相互態、使役態などが挙げられるが、一つ言えそうなことは、能動態と受動態の対立がヴォイスの典型例であるということである。しかしながら、世界の言語にはハンガリー語のように受動態が存在しない言語もあり、その場合にはさらにヴォイスを定義することが難しくなる。

ロシア語におけるヴォイスの定義も実に様々な見解があり、大きく二つの立場に分類される。まず一つめは、ヴォイスを統語的・語彙的意味の観点から分類を行った Шахматов (1941) に代表される理解である。Шахматов (1941) におけるヴォイスの定義は、「ヴォイス形態で表現されるのは動作の主体と客体の関係であるか、その動作を表す動詞と客体との結合不可能性」(Шахматов 1941: 476) であるとし、ヴォイス・カテゴリーを統語的なカテゴリーとしてみなしている。また、ヴォイス・カテゴリーに分類されるものとし

3 「ヴォイス」の日本語訳として、しばしば「態」または「相」が当てられるが、「相」という用語は、アスペクトの日本語訳にも使われているため、ヴォイスの日本語訳としては「態」が適訳であると考えられる。

て能動態，受動態，再帰態という基本的なヴォイスとその下位グループの合わせて 11 の態を区別している．すなわちシャフマトフ (A.A. Шахматов) におけるヴォイスの捉え方は動詞の他動性／自動性の形態的特徴に注目している点である．この考え方は *Русская грамматика* (1980) へと引き継がれていく．

二つめは，ヴォイスを形態的カテゴリーとしてみなす Исаченко (1960) の理解である．Исаченко (1960) は，二項対立の考え方をもとに，明確な不変的標示 (S←V) をもつ受動態を有標項とし，無標項である能動態と区別した．すなわち，受動態を動詞が表す動作の主語への方向性として捉えたのである．この二項対立の考え方にたてば，受動態に属さない動詞はすべて能動態に含まれることになり，すべての動詞がヴォイスに属することになる．

このようにロシア語においても，ヴォイスの定義は研究者によって一様ではなく，どこまでをヴォイスの射程に収めるかは様々であることがわかるであろう．さらにロシア語以外の言語，例えば英語や日本語に目を向けてみると，特に日本語においてはロシア語とは全く趣が異なっており，鷺尾 (1997: 3) には次のような英語と日本語における定義の比較がある．

Voice (態) 主語と，動作の表す動作との主格関係を表す動詞の形態をいう．Jim read 'Hamlet' と 'Hamlet' was read by Jim のような変化をいう．前者を能動態 (Active Voice)，後者を受動態 (Passive Voice) という．両者の伝える客観的事実そのものは同じであるが，話者の観点が違うのであって，前者は動作主の観点から，後者は動作を受ける対象物の観点から述べている．[後略] (大塚高信編『新英文法辞典』三省堂，1959)

相《文法》voice 動詞によって表される動作の性質．態とも．一般に，自動・他動・受身・可能・敬譲・使役等の事実をさす．三矢重松は，自他を動詞の「性」，受身・可能・使役・敬譲を「相」，と名づけ，それぞれ被使役・可能相・使役相・敬相とし，さらに…… [後略] (国語学会編『国語学辞典』東京堂出版，1955)

この『国語学辞典』の定義は，鷺尾 (1997: 3) によれば，時枝誠記が執筆したものであるとされるが，ヴォイスの定義に「自動・他動・受身」から「可能・敬譲・使役」まで含

める発想は、印欧諸語の観点からは出てこないだろう。

このように、ヴォイスとは何かという問いに対する明確な答えを見つけることはかなり難しいといえる。とりあえず一つ言えそうなことは、能動態と受動態の対立がヴォイスの基本的な概念であるということであるが、世界の言語にはハンガリー語のように受動態が存在しない言語もあり、その場合にはそもそもヴォイスというものが存在するのかという問題に直面することになる。さらに受動態が存在する言語であっても、例えばロシア語のように、受身表現の代用として不定人称文という動作主項を表示させない構文を発達させている言語もあり、その場合には、そもそも能動態と受動態の対立が、第3章で後述するところであるが、普遍的な事実なのかどうかという問題が生じてくる。

さて、ヴォイスを正面から記述することは難しいことをみたが、この問題に立ち向かうべく、1970年にソヴィエト言語学で導入されたヴォイスに代わる理論がディアテシス (diathesis, диатеза)⁴と呼ばれる理論である。

1.2 ディアテシスとは

ディアテシスは、ホロドヴィチ (А.А. Холодович) とメリチュク (И.А. Мельчук) によって提唱された、言語の普遍性という観点からヴォイスの記述を試みた新しい理論である。このディアテシスの理論は、Храковский (1974, 1981, 1991), Chrakovskij (1976), Khrakovsky (1979) においてロシア語の観点から詳細に解説されている (Храковский 1974: 5-45, 1981: 5-38, 1991: 141-148; Chrakovskij 1976: 51-62; Khrakovsky 1979: 289-307)。また栗原 (1981) では、このフラコフスキー (В.С. Храковский) によるディアテシス理論の説明の一部が紹介されている (栗原 1981: 15-18)。以下、上記の文献を基にディアテシスとは何かを概観する。

4 диатеза という用語は、ギリシャ語の diathesis からの借用語であるが、山口 (2005: 246) によれば、「この語は元々 disposition, arrangement, すなわち「性向」, 「態度」, 「配列」などの意味を持っており、ロシア語では dia に当るものを за「向うに」で、thesis を лог「横たわる, 置く」で置き換えた、いわゆるカルク (calque) である」としている。すなわちロシア語には、英語の voice, ギリシャ語の diathesis にあたる狭義の залог と、ヴォイス一般を指す広義の диатеза という二つの用語が存在することになる。диатеза に対する適切な日本語訳が存在しないので、本論では залог を「ヴォイス」、диатеза を「ディアテシス」とする。

フラコフスキーは、ディアテシスを検討するにあたり、「一つの文に含まれている情報はその文の頂点である動詞の語彙的解釈に含まれる情報に等しい」(Храковский 1981: 5) という仮説を設定した上で、ディアテシスの定義づけを行っている。

ディアテシスとは、意味的な構成要素である、文に表現された出来事の参与者(主体, 客体, 道具, 出発点, 終着点, 受け手など)と、統語的な構成要素である、言語的な構造の参与者(主語, 直接補語, 間接補語など)との間の相関関係を示したものである。

(Храковский: 1974: 13, 1981: 5, 1991:142)

さらに Храковский (1991) では、ディアテシスについて次のように述べている。

ディアテシスの概念は意味的・統語的であり普遍的である。すなわち、あらゆる言語のあらゆる動詞の語彙素は、少なくとも一つのディアテシスを持っている。……出来事の参与者の意味的な役割として、主体 (Агенси), 経験者 (Экспериенцер), 客体 (Пациенси), 受け手 (Реципиент), 道具 (Инструмент), 受益者 (Бенефициант), 場所 (Локатив), 目的 (Цель) などが挙げられる。

(Храковский 1991: 143-144)

Бондарко (1991) も、ディアテシスと同じものと言える、ヴォイス性 (залоговость) に対して、次のような規定を与えている。

ヴォイス性とは、文の統語的な構造の様々な要素(主語, 直接補語, 間接補語)に対応する意味的なカテゴリーとしての主体と客体に対する、動詞で表される動作を特徴づける様々なタイプの関係を表現する、機能・意味的な場と規定される。

(Бондарко 1991: 126)

Khakovsky (1979) によれば、1つの動詞にはその動詞に内在されている意味的役割と、その動詞が取る名詞句の統語的機能があらかじめ決められているとされる (Khakovsky 1979: 295, 301-302)。例えば、причесать (〈髪を〉とかす) のディアテシスは以下の (6)

で表されているように典型的な他動詞であるので、2つの項を持ち、その項にそれぞれ主体、客体という意味的役割と、主語、目的語という統語的機能が付与されるとしている (Храковский 1981: 5-6)。

(6) Оля причесала Машу. (オーリャがマーシャの髪をとかした.)

(6) では、意味的役割として Оля が主体、Маша が客体になり、統語的機能として Оля が主語、Маша が直接補語になる。

一方 (6) における基本文に対して、以下の (7) は (6) から派生される受身文である。

(7) Маша была причесана Олей. (マーシャはオーリャに髪をとかされた.)

受身文である (7) では、意味的役割として Маша が主体、Оля が客体になり、統語的機能として Маша が主語、Оля が動作主補語になる。以上のことはそれぞれ以下のように表で示すことが可能である (Храковский 1981: 5-6)。

表 1 他動詞文のディアテシス

[意味的役割]	主体	客体
[統語的機能]	主語	直接補語

表 2 受身文のディアテシス

[意味的役割]	主体	客体
[統語的機能]	動作主補語	主語

このように、他動詞文や受身文といった典型的なヴォイスとされる構文を考察する場合には、動詞のもつ意味的役割と統語的機能の相関性のみを比較することで両者の構文の違いを捉えることができるのである。一方、再帰文や相互文といったヴォイスの下位分類に含まれる構文を考察する場合には、これらの構文で使用される動詞が他動詞に含まれることを理由に挙げて、上記の意味的役割と統語的機能のほかに、指示対象 (референт, referent) との相関性の考察も必要になってくることが Khrakovsky (1979), Храковский (1981)

で指摘されている (Khrakovsky 1979: 305; Храковский 1981: 10-11).

(8) Оля причесалась. (オーリャは自分の髪をとかした.)

(9) Оля причесала себя. (オーリャは自分の髪をとかした)

(8) は再帰動詞を使用した再帰文の例, (9) は再帰代名詞 себя を使用した再帰文の例である. 再帰文においては 2 つの指示対象が等しくなるのであるが, (8) の再帰動詞の場合には意味的役割も等しくなる一方で, (9) のような再帰代名詞の場合には意味的役割が異なってくる. 以下の表 3, 表 4 はそれぞれ表 1, 表 2 に指示対象を加えたもので, 表 5 は再帰動詞を使用した再帰文, 表 6 は再帰代名詞を使用した再帰文のものである (Храковский 1981: 11, 13).

表 3 他動詞文のディアテシス

[意味的役割]	主体	客体
[指示対象]	指示対象 1	指示対象 2
[統語的機能]	主語	直接補語

表 4 受身文のディアテシス

[意味的役割]	主体	客体
[指示対象]	指示対象 1	指示対象 2
[統語的機能]	動作主補語	主語

表 5 再帰動詞のディアテシス

意味論的役割	主体	客体
指示対象	指示対象 1	
統語論的機能	主語	

表 6 再帰代名詞のディアテシス

意味論的役割	主体	客体
指示対象	指示対象 1	
統語論的機能	主語	直接補語

このようにディアテシスの理論は、ヴォイスが統語的・意味的に考察されるだけでなく、ヴォイスに分類される動詞のディアテシスの違いが表によって明確に示され、例えば再帰文における再帰動詞や再帰代名詞の差異をも比較、記述することが可能になるのである。

さて、本論ではロシア語の受身文を考察することを目的としているので、以下、ディアテシスにおいてロシア語の受身文がどのように規定されているのかを見ていきたい。

Chrakovskij (1976) では、ロシア語の受身文について次のように規定している。

動作主-主体の関係は、能動文が受身文に変換される際に破棄される。受身文においては、動作主は動作主-客体として現われるかまったく表示されない。また、主体の位置は動作主以外の他の参加者によって占められるか、空いたままになる。

(Chrakovskij 1976: 51)

Chrakovskij (1976) によれば、ディアテシスの関係を Δ で表わし、基本文を Δ_0 、それから派生される文を Δ_1 , Δ_2 …… で表わすことにすると、ロシア語の受身文は次のように公式化することができる (Chrakovskij 1976: 51-52)。

以下、略称: Ag (agens 動作主), Sb (subjectum 主体), Pt (patiens 被動作主), V (verbum 動詞), Ob (objectum 客体), Ob^{rec} (objectum, rectus 対格形客体), Ob^{ob1} (objectum, obliques 斜格形客体), Adr (addressee 受け手)

$$1. \Delta_0 (Ag=Sb), (Pt=Ob^{rec}) \rightarrow \Delta_1 (Pt=Sb), [(Ag=Ob^{ag})]$$

Плотники строили школу. → Школа строилась (плотниками).

$$2. \Delta_0 (Ag=Sb), (Pt=Ob^{ob1}) \rightarrow \Delta_1 (Pt=Sb), [(Ag=Ob^{ag})]$$

Альпинисты достигли вершины. → Вершина была достигнута (альпинистами).

$$3. \Delta_0 (Ag=Sb), (Pt=Ob^{ob1}) \rightarrow \Delta_1 (Pt=Ob^{ob1}), [(Ag=Ob^{ag})]$$

Преподаватель указал на ошибку. → На ошибку было указано
(преподавателем).

4. Δ_0 (Ag=Sb), (Pt=Ob^{rec}) → Δ_1 (Pt=Ob^{rec}), [(Sb=Ob^{ag})]

Волки съели корову. → (У волков) корову съедено. (方言)

さらに Храковский (1974) は、能動文と受身文の関係を類型論的な観点から公式化を行っている (Храковский 1974: 15-16)。以下、0. が基本文、1. 2. ... が受身文である。

I. 1 項文

0. V + (Sb=Ag) Я ездил.

1. V Езжено.

2. V + (Ob=Ag) Мною езжено.

II. 2 項文

0. V + (Sb=Ag) + (Ob=Pt) Молния разбила стену.

1. V + (Ob=Pt) Стену разбило.

2. V + (Ob=Pt) + (Ob=Ag) Стену разбило молнией.

3. V + (Sb=Pt) Стена разбита.

4. V + (Sb=Pt) + (Ob=Ag) Стена разбита молнией.

III. 3 項文

0. V + (Sb=Ag) + (Ob^{rec}=Pt) + (Ob^{ob1}=Adr)

1. V + (Ob^{rec}=Pt) + (Ob^{ob1}=Adr)

2. V + (Ob^{rec}=Pt) + (Ob^{ob1}=Adr) + (Ob=Ag)

3. V + (Sb=Pt) + (Ob^{ob1}=Adr)

4. V + (Sb=Pt) + (Ob^{ob1}=Adr) + (Ob=Ag)

5. V + (Sb=Adr) + (Ob^{rec}=Pt)

6. V + (Sb=Adr) + (Ob^{rec}=Pt) + (Ob=Ag)

ロシア語では上記の 3 項文のうち、1, 2, 4 か 1, 2 のタイプの受身文が可能とされる。

0. Отец подарил брату книгу.

1. Брату подарили книгу.

2. Книга подарена брату.
4. Книга подарена брату отцом.

0. Преподаватель указал Маше на ошибку.
1. Маше указано на ошибку.
2. Маше указано на ошибку преподавателем.

Храковский (1974)によれば、ロシア語の受身文は上記の論理的に可能な受身文のすべてが成立することは稀であり、例えば主語がヒトか事物かで成立条件が大きく変わってくるとされる (Храковский 1974: 17)。

以上 Храковский (1974), Chrakovskij (1976)における受身文の規定および分類を見てきたわけであるが、受身文の普遍的な特徴とは、能動文に特有の「主体-主語」の対応関係が崩され、主体が主語の位置を占めないような文であるといえるだろう。伝統的に「不定人称文」、「無人称文」と呼ばれている構文の一部が、フラコフスキーの受身文の定義に従えば、受身文に分類されることになる。すべての不定人称文、無人称文を一律に受身文とみなすのにはすこし問題があるように思われるが、不定人称文や無人称文を受身文と理解するフラコフスキーの主張は本論の考え方と同じである。

第2章 研究の目的・方法および概要

2.1 研究の目的

本論は、人間とことばがどのように関係しているのかをヴォイスという具体的な言語現象の中で考察する。特にヴォイスのなかでも典型的な体系とされる受身文に焦点をあてて、人間がどういう判断基準で可能な複数の表現形式から一つを選択するのかということ明らかにしていく。具体的には、能動態と受動態の対立が普遍的な概念ではないということと、従来形態的に能動態のカテゴリーとして分類されてきたロシア語の不定人称文という構文が受身表現を担うということの問題意識をもって、まずは歴史的な観点から受身文を考察していく。これは、ことばというものが人間が活動していくなかで刻一刻と変化していくものであり、その変化過程を明らかにすることは取りも直さず人間の表現形式の選択条件を明らかにすることにつながると考えられるからである。そしてそれを基にして、現代ロシア語の受身文を実際の言語資料を分析対象として、古代ロシア語から現代ロシア語への使用状況の変遷をみていく。

2.2 研究の方法

本論では、現代ロシア語の受身文の考察に際して、実際に使用されているテキスト、すなわち現代ロシア語文学作品を分析対象にした。分析対象として現実にあるテキストを使用した理由としては、先行研究において具体的に言語資料を分析したものは林田（1999, 2000, 2001, 2011, 2013）しかないという事実である。もう一つは、先行研究で指摘されている情報と実際の運用状況の中で起こっている一致点やずれを観察したいためである。さらには、ロシア語の受身文をアスペクトの観点から考察しその意味を確定する場合には、複数のまとまった文の中で観察することが必要不可欠であり、大量にまとまった数を収集できるという点でも、現代ロシア語文学作品を分析対象とした。ただ、文学作品のテキストを考察対象にするときには、その作品の作家特有の文体的特徴が使用されている場合も考えられるため、特定の作家に偏らないように注意した。また、ある程度認められた作家の作品を収集するために、日本語に翻訳されている作品に限定した。

2.3 論文の構成

本論は以下のように構成されている。

第Ⅰ部「序論」第1章では、ヴォイスの基本的な枠組みとディアテシスという新しい普遍的な概念を先行研究に基づき整理した。そのなかで、ヴォイスを定義することの難しさ、能動態と受動態の対立が普遍的な事実ではないということ、ロシア語で観察される不定人称文が受身文の一種であるということの三点を強調した。第2章では、研究の目的・方法及び論文の構成について述べた。

第Ⅱ部「ロシア語の受身表現」では、ヴォイスの典型的な体系とされる受身文に焦点をあてて、ロシア語という具体的な言語の中で考察を行っていく。まず第3章では、第1章でみた事実の根拠となるものを、受動態の起源、歴史的な変遷過程のなかで探っていく。つづく第4章では、これまでのロシア語の受身文研究においてどのような観点から考察されてきたのかをまとめている。代表的な先行研究としては、Шахматов (1941), Исаченко (1960), Comrie (1976), Русская грамматика (1980), Князев (1983), Маслов (1983, 1984, 2001), Недялков, Яхонтов (1983), Шелякин (1989), Пупынин (1991), Храковский (1991), 林田 (1999, 2000, 2001, 2011, 2013), Падучева (2004) が挙げられる。それらの研究では概ね受身文とアスペクトとの相関性が議論されてきたといえる。第5章、第6章では、ロシア語の受身文のアスペクト的意味・機能を現実にあるテキストを使用して具体的に分析し検証している。ここでは現実のテキストにあたることで、先行研究で指摘されている理論と実際の運用状況の中で起こっている相関性、ずれを観察している。さらにこれまでほとんど考察されてこなかった受身文と不定人称文の差異化原理および受身文とOVS能動文の差異化原理を明らかにすることを試みている。

第II部

ロシア語の受身表現

第3章 受動態の起源

これまでのヴォイス研究では、暗黙の了解として、能動態と受動態を表裏一体のものとして捉えられることが多い。しかしながら、それが本当に普遍的な事実なのかどうかは疑いを持たざるを得ない。周知のごとく、我々の世界には受動態を持たない言語が現に存在する。アンナ・シェヴィエルスカ（2013）によれば、調査対象の373言語のうち典型的な受動態をもつ言語の数は162（44%）であり、受動態をもたない言語の数211（56%）よりも少ないとされる（Siewierska 2013）⁵。この事実は非常に興味深い。受動態をもつ言語を第一言語とする我々からすれば、どうしても受動態の存在が一般的であると考えがちであるが、圧倒的に多いとは言えないものの、受動態をもたない言語のほうが多いという事実が現実問題としてあり、さらに受動態をもつ言語の場合であっても、ロシア語のように伝統的に能動態カテゴリーに分類される不定人称文という表現形式で受動態の代用をしばしば行うということを考えると、能動態と受動態の対立の普遍性に疑問の余地が生まれてくる。

この章では、この疑問を解決するべく、まず受動態の起源はどこにあるのかを探ってみたい。

3.1 受動態の起源

印欧諸語で見られる受動態は、歴史的には中動態から派生したものであり、印欧祖語には受動態は存在せず、能動態と中動態のみが区別されていたとされる（高津 1960: 321; 山口 1995: 104; 石田 1996: 314）。中動態とは古代ギリシャ語、サンスクリット語、ラテン語の一部で観察される態であるが、Benveniste（1974）によれば、この能動態と中動態の対立には、「主体と過程の関係に関わる、言語的な区別の核心が浮かび上がってくる」と指摘し、「能動態においては、動詞は主体に発して外部へ向って展開して行く過程を表す。能動態との対立を通して規定される中動態においては、動詞は主体内で展開される過程を表し、主体は過程に対して内的である」としている（Benveniste 1974: 188; バンヴェニスト

5 ホームページ上では、世界における受動態の分布状況が具体的に地図上で確認でき、その他にも受動態に関する有益な情報が閲覧可能である。URLは参考文献を参照のこと。

1983: 169). この対立は、内容類型学の観点からすれば、遠心相と求心相の区別であったとされ、前者は行為が活性行為項の圏内を越えて広がり行くことを表し、後者は行為が行為項内に閉じ込めることを表す(クリモフ 1999: 115-116). つまりそこにおける対立は、現在我々がよく知っている能動態と受動態の対立からイメージされるのとは全く異なったものであり、行為が行為主体の外に向かうのか、行為が行為主体の内部にとどまるのかの違いを表しているのである.

この始原的に受動態は存在しなかったという事実はなにも印欧諸語だけの話ではない. 我々の第一言語である日本語においても観察されるのである. 日本語の受身の形式を示す「れる」、「られる」は、周知のように、受身以外に可能、自発、尊敬の用法がある. 細江(1928)によれば、「古代日本語に存在したのは能動と受動の対立ではなく、能動と中動(自発)の対立であった」とされる(細江 1928: 111-112). すなわち日本語においても、歴史的には印欧諸語と同じように受動態は存在せず、中動態に似た自発と能動態が対立していたのである.

では、受動態という概念はどのようにして発生してくるのか. このことについては、ロシア語の観点から、Данков(1981)、石田(1996)、Крысько(1997)、林田(2000)で詳細に論じられている(Данков 1981: 59-94; 石田 1996: 314-316; Крысько 1997: 375-382; 林田 2000: 27-29). スラヴ祖語では他の印欧語と同じく中動態を表す特別な人称語尾による形態的手段はすでに消失しているが、この中動態の機能は、スラヴ祖語、古代ロシア語においては動詞に対して統語的性格をもつ再帰代名詞の対格前接形(ся)が継承している. この再帰代名詞が次第に動詞との形態的結合を強め、動詞に後置する接辞要素(-ся)に変わり、現代ロシア語の再帰動詞となるが、石田(1996)によれば、この統語的結合から形態的結合への転換の過程で、動作が主体内にとどまり他に及ぼさない中動的意味は、自身が動作を被る意味に転換され抽象化し、本来的な動作の受身表現という文法的意味を獲得するに至ったとされる(石田 1996: 316).

このような中動態から受動態への意味的拡張の事実は、Данков(1981)における、「古代ロシア語の文献における-ся 動詞のうち、受身の意味で使われているものは全体のわずか7-9%である」(Данков 1981: 86-87)という指摘や、Крысько(1997)における、「12-13世紀の古代ロシア語における多くの他動詞は、受身の意味の-ся 動詞をもたなかった」(Крысько 1997: 375)という指摘からも窺い知ることができる. またロシア語以外でも、例えば古代ギリシャ語においても、高津(1960)によれば、「ホメーロス(Homeros)の

叙事詩には受身は非常に少なく、行為者を明示した例はほとんど存在しない」とし、「受身は文献時代以後においても発達が遅れるのであって、古典時代に至ってもなお受身と中間態の間の区別が明瞭ではなく、形態上からは明示出来かねる場合が多い」としている（高津 1960: 321）。以上の事実は、あとの第 6 章でみるように、現代ロシア語へと引き継がれていくのである。

3.2 分詞形の起源

分詞形の起源・歴史的な変遷過程については、すでに Ломтев (1956), Данков (1981), 林田 (2000), 石田 (2007) が明らかにしている (Ломтев 1956: 174-211; Данков 1981: 9-58; 林田 2000: 18-27; 石田 2007: 47-58)。また山口 (1998) では、印欧諸語の観点から -н-/-т- 形接尾辞の過去分詞について興味深い考察を行っている (山口 1998: 302-318)。以下、本論では分詞形のうち現代ロシア語の受身文に使用される受動過去分詞 (-н-/-т-) 形の起源・歴史的な変遷過程を見ていく。

分詞形は印欧諸語では古代から現代に至るまで一貫して幅広く使用されてきた形態であり、ロシア語においても分詞の中でも受動過去分詞は全歴史において唯一生産性が高く、広く使用されてきた形態である。

印欧語における -н-/-т- 形過去分詞の起源は動詞派生形容詞が始まりであり、本来ヴォイス・カテゴリーとは無関係な状態指標を表すものであったとされる (ドブレフ 1993: 210-215; 石田 1996: 318, 327; 石田 1998: 46; 山口 1998: 302-306)。古代ロシア語において観察される、非他動詞や再帰動詞から受動分詞が形成されたこと (Кузьмина, Немченко 1982: 381-382) はこの事実を示唆するものであり、-н-/-т- 形過去分詞が受身表現ではなく、状態指標を表す形式であったことが窺える。また古代ラテン語においても、中山 (2007) によれば、「始原的にはラテン語の完了分詞には態や時制という概念は存在せず、歴史的に態の意味を帯びてきたとしても、それは未だ受身の意味を表現しているとは限らない」としている。ロシア語においては、-н-/-т- 形過去分詞は「動作の結果としての状態」という本来的なパーフェクトの意味を表し⁶、分詞形として唯一、アスペクト・

6 パーフェクトとは、古スラヴ語における 4 つの過去時制 (アオリスト, パーフェクト, プルパーフェクト, インパーフェクト) の一つで、ロシア語ではアスペクト・カテゴリーの発達によってそれらの 4 つのタイプが完了体/不完了体に集約されていった。印欧

カテゴリーの発達の影響を受けずに現在に至るまで受動過去分詞の本来的な意味を表現し続けている。

では受動過去分詞がなぜアスペクト・カテゴリーの発達の影響を受けなかったのか。Ломтев (1956) によれば、「ヴォイス・カテゴリーの減退，脱活性化」を根拠に挙げて、「-н-/-т-形過去分詞は受動態本来の動作主による動作表現として機能しているのではなく，動作主ではない事物の動作の結果としての状態を表現しており，その結果完了体動詞述語の文法的使命とは異なり，動詞が分詞を駆逐することにはならなかった」としている (Ломтев 1956: 182-185; 石田 2007: 51-52)⁷。現代ロシア語における-н-/-т-形過去分詞を使用した受身文のほとんどが造格形による動作主項をもたない (Бондарко, Буланин 1967: 168, 173-174; Пупынин 1991: 214-215) という事実からもわかるように，この形態を使用した受身文はまず動作の結果としての状態を表現する形式であり，受身の意味はそこから派生された二次的なものであると理解することができる。

以上，3.1, 3.2 で述べた点を踏まえると，ヴォイスという概念は単なる能動態と受動態の対立として捉えるものではなく，能動態—中動態—受動態という連続線によって理解されるべきものであることがわかるだろう。

祖語における始原的なパーフェクトは，内容類型学の観点によると，活格動詞—不活格動詞の対立における不活格動詞にあたり，主体の不活発で非能動的な状態を表す状態動詞の一種であったとされる (Маслов 1983: 46; 石田 1996: 296; クリモフ 1999: 175-177)。

7 一方，ロシア語のもう一つの受動現在分詞 (-м-) 形は経過過程にある動作を表すが，この特徴は不完了体動詞述語と同じ機能であり，その結果この分詞は存在意義を失うことになり，現代ロシア語ではほとんど使用されない (石田 2007: 51-52)。

第4章 ロシア語の受身文に関する先行研究

現代ロシア語の受身文には、すでに第3章でみたように、原則として動詞の体によって2つの表現形式が区別される。完了体他動詞は古代ロシア語から現代ロシア語にかけて一貫して広く観察される受動過去分詞（-н-/ -т-形）を使用した分詞形受動文によって、不完了体他動詞は中動態を起源とする再帰動詞を使用した再帰形受動文によって、受身の意味が表現される⁸。

現代ロシア語の受身文に関する先行研究の代表的なものとして、Шахматов (1941), Исаченко (1960), Соггье (1976), Русская грамматика (1980), Князев (1983), Маслов (1983, 1984, 2001), Неद्याлков, Яхонтов (1983), Шелякин (1989), Пупынин (1991), Храковский (1991), 林田 (1999, 2000, 2001, 2011, 2013), Падучева (2004) などが挙げられる。これらの諸研究での議論の中心は、次の4点に集約されるであろう。

- I : ロシア語受身文にはどのような形態的・統語的な制約があるか
- II : ロシア語受身文のアスペクト的意味はどのようなものであるか
- III : IIに関連して、受身文と対応の能動文に表現的差異が観察されるか
- IV : 分詞形受動文に観察される現在時制をどう位置づけするか、換言すれば、完了体能動文の時制形態は過去と未来の二時制に対し、完了体から派生される分詞形受動文には過去、現在、未来の三時制が存在し、同期的視点を許容しない完了体に対し、なぜ分詞形受動文にのみ現在時制が現れるのか

上記に挙げた先行研究においては、IVの問題も絡み、分詞形受動文を中心に考察が行わ

8 不完了体動詞→再帰形、完了体動詞→分詞形はあくまで原則論での話である。一部の不完了体動詞は受動現在分詞が、完了体動詞については再帰形が対応する。前者については現代ロシア語ではほとんど使用されない。後者については *забыться* など一部の動詞で観察されるが、このことについての先行研究での記述はほとんどみられず、本論でも考察の対象にしていない。完了体再帰形受動文の一つの特徴として、動作主項が表示されないということにある。現時点では、この構文について動作主項が表示されないということはそもそも受身文といえるのかという疑問を筆者はもっているが、そのことに関する具体的な考察は今後の課題としたい。

れており、再帰形受動文に関しては I が中心であり、II に関する記述が見られるのは Шелякин (1989), Пупынин (1991), Храковский (1991), 林田 (1999, 2000, 2001, 2013) のみである。I については、すでに林田 (1999) で詳細に考察されているので、本論では、II～IV を中心に考察していく。

4.1 ロシア語受身文のAspect意味研究

4.1.1 Шахматов (1941)

Шахматов (1941) は、分詞形受動文に関して次のように規定している。

-н-/-т-形受動過去分詞は、助動詞が使用されない場合にはパーフェクトを表し、был や буду とともに使用される場合にはそれぞれ過去時制，未来時制を表す。

(Шахматов 1941: 480)

さらに、Шафматовはパーフェクトに関して、以下のように述べている。

パーフェクトは、結果達成的な形で現在時点までに実現した行為，話し手の発話時点までに実現された行為を意味する。

(Шахматов 1941: 489)

つまりШафматовは、分詞形受動文のテンス的側面に関して、分詞形受動文に観察される三時制を、過去・パーフェクト・未来と規定したのである。ここで注目すべきことは、対応の完了体他動詞能動文には観察されない、分詞形受動文の現在時制を一律にパーフェクトとみなしたことであろう。しかしШафматовの議論は、単に-н-/-т-形分詞の受動文の現在時制をパーフェクトと規定したにすぎず、そこにおいてはそれ以上の詳細な考察はなされておらず、なぜ分詞型受動構文の現在時制がパーフェクトを表すのかという問題は明らかにされていない。さらにここで注意しなければならないことは、Шафматовはパーフェクトをテンス的概念として捉えていることである。

ロシア語では、形態的に4つの時制に区別される。それは、現在、過去、未来、パーフェクトである。

(Шахматов 1941: 486)

4.1.2 Исаченко (1960)

分詞形受動文に関する体系的な研究は Исаченко (1960) に始まる。それ以前にも分詞形受動文に関する記述はあったが、分詞形受動文の全体像を解明するものではない。Исаченко (1960) は、意味的な側面に注目し、シャフマトフの論、すなわち-Н-/-Т-形過去分詞の現在時制を一律にパーフェクトと規定していることに批判している。

これまでの文献において、Дом построен における построен タイプの受動形が「パーフェクト」の意味をもつということは一指ならず指摘されてきた。したがってこのようなタイプの述語形式をパーフェクトと定義することは可能である。……しかしながらパーフェクトの意味はこの形式の唯一の文法的意味ではない。規範文法に基づけば、この построен 形には、完了体受動現在と名づけるのが何よりも都合がよい。

完了体の受動形は、「過去の動作から発生する現存の状態＝状態受動 (статальный пассив)」(いわゆる「パーフェクト」と「非現実性の過程－出来事＝動作受動 (процессуальный пассив)」の2つの意味をもつ。…… Дом построен の文における動詞形態はそれ自体いかなるテンスの意味も持たない。…状態受動 (Дом построен из кирпича. 「家は煉瓦作りだ」) の場合には、《現存の状態》の意味(すなわち発話時点への所属)が前面に押し出されるが、この状態を引き起こす過程－出来事自体は話し手の視野の外に置かれている。完了体受動現在がこの意味のみを持つなら、ロシア語の『パーフェクト』であっただろう。しかし、完了体受動現在は動作受動の意味 (Дом построен в прошлом году. 「家は去年に建てられている」) も持ち得る。この文の построен 形はそれ自体いかなるテンスの意味も持たない。テンス的パースペクティヴは補足的な語彙的手段によってのみ、すなわち文における時の状況語(副詞)の存在によってのみ形成される。

イサチェンコの議論で重要なことは、意味的な側面に注意を払い、分詞形受動文を「状態受動」と「動作受動」の二種類に分類し、その中で「状態受動」がシャフマトフが言うパーフェクトにあたることとしたことであろう。ここで注意しなければならないことは、パーフェクトをテンス的概念ではなく、アスペクト的概念として捉えていることである。だからこそ、分詞形受動文の現在時制をパーフェクトではなく、完了体受動現在と規定したのである。

〈イサチェンコによる分詞形受動文の意味的二分類〉

状態受動 (=パーフェクト) : 「過去の動作の結果としての現存の状態」
(発話時点とリンクする)

(10) Дом построен из кирпича. (家は煉瓦作りだ.)

動作受動 : 「現存していない過程－出来事」(発話時点とリンクしない)

(11) Дом построен в прошлом году. (「家は去年に建てられている」)

イサチェンコは、分詞形受動文の過去時制と未来時制についても、この「状態受動」「動作受動」という意味的二分類は保持されるとしている。以下の(12), (13)が「状態受動」の例, (14), (15)が「動作受動」の例である。

(12) Когда мы вошли в комнату, стол был уже накрыт.

(私たちが部屋に入ると、もう食卓の用意ができていた.)

(13) Когда мы вернёмся, стол будет накрыт.

(私たちが部屋に入ると、食卓の用意ができているだろう.)

(14) Вслед за чемоданом внесён был ларчик из красного дерева.

(スーツケースに続いて運び込まれたのはマホガミー製の小箱だった.)

(15) Следующее совещание будет созвано в ноябре.

(次の会議は 11 月に召集されるだろう.)

(Исаченко 1960: 367-368)

イサチェンコの議論で必ず押さえておかなければならないことは、分詞形受動文を「状態受動」「動作受動」という意味的側面に注意を払い二分類化したことである。イサチェンコ以降の研究者の多くは、この意味的二分類に従って考察を行っており、イサチェンコの研究が分詞形受動文の研究に大きな影響を与えたのは間違いないであろう。

4.1.3 Comrie (1976)

言語類型論的にヴォイスとアスペクトが何らかの相関関係を持つことは様々な先行研究で言及されている。Comrie (1976) は、ヴォイスとアスペクトの間の相関性を指摘し、次のように述べている。

多くの言語において、…… アスペクトとヴォイスの間には相互関係がみられる。…… パーフェクトの意味のはっきりとした表現は、受身のヴォイスにおいてのみ可能であるが、能動のヴォイスにおいてはそうはならない。ロシア語では、*Коньяк вытум* は明らかに ‘the brandy has been drunk’ (コニャックは飲んでしまっている) であって、‘the brandy was drunk’ (コニャックは飲まれた) ではない。後の意味ならロシア語では *Коньяк был вытум* となる。しかしこの区別だけでは能動のヴォイスで行うことはできない。つまり、*Он вытил коньяк* は ‘he drank the brandy’ (彼はコニャックを飲んだ) にも、‘he has drunk the brandy’ (彼はコニャックを飲んでしまっている) にも対応する。この区別だけでは、…… 受身のいくつかのテンスの場合にだけ保たれている。…… 受身をつかった場合にだけパーフェクトの意味をはっきり前に押し出すことができるのである。

(Comrie 1976: 84-85; コムリー 1988: 134-135)

では、なぜパーフェクトと受身の間にこのような特別な関係が成立するのか、という疑問が生じてくるが、コムリー (B. Comrie) は、このことに関して次のように説明している。

…… パーフェクトは過去の動作を現在の状態に関係づける。つまり、現在の状態をある過去の動作の結果として表現することができる。多くの言語では、受身の古い形式は、同じように状態的である。仕手と対象とを含みこんでいる動作が生じるとき、その結果としてもたらされる状態の変化は、普通は仕手よりも対象の中にいっそうはっきりと現れてくる。…… だから、他動詞とかかわっては、ある動作の結果生じてくる、いちばんありうる状態は、意味的には動作の対象として現れてくるものの、変化した状態であるだろう。…… パーフェクトの受身は、…… ある動作の対象に状態の変化が起こっていることを述語の中に述べるための形式である。

(Comrie 1976: 86; コムリー 1988: 137-138)

つまり、コムリーは、ヴォイスとアスペクトの間の相関性に関して、ロシア語の完了体他動詞派生の分詞形受動文の現在時制のみがパーフェクトを明確に表すことが可能であり、それ以外の時制および完了体動詞能動文の過去時制はこのような明確な区別立ては不可能で、パーフェクトと非パーフェクトのいずれの働きも持つことができるとしているのである。

ヴォイスとアスペクトの間の相関性に関しては、コムリーの他にも 80 年のアカデミー文法 (Русская грамматика 1980), Недялков, Яхонтов (1983) などもコムリーと同様の見解を示している。

アスペクトとヴォイスの機能的な結びつきは、受動分詞形でパーフェクトの意味を表現する場合に顕在化される。…… そのような場合のパーフェクトの意味は、状態を示す受動過去分詞形がありさえすれば表現されている。…… アスペクト・テンスとしてのパーフェクトを表す受動過去分詞短語尾形が使用される場合、伝達されているのは先行する動作の結果としての状態の、より遅い時間段階への所属である。…… そのような場合のパーフェクトの表現に存在しているのは、受動分詞形である。完了体動詞の受動過去分詞短語尾形は安定したパーフェクトの意味を所有している。(一方、完了体動詞過去時制の能動相においては、パーフェクトの意味は、可能性のある使用タイプのうちの一つである。)

(Русская грамматика 1980: § 1537, § 1543)

結果相 (результатив)⁹と他動詞派生の完了体受動形に関しては、それらは受動形と結果相の一致が頻繁に観察される。…… この場合の出現頻度は、現在、過去、未来の順に減少していく。

(Недялков, Яхонтов 1983: 31-32)

4.1.4 Маслов (1983, 1984, 2001)

Маслов (1983, 1984, 2001) の研究は、すでに見た 4.1.2 のイサチェンコの研究と同様に、Шахматов (1941) の議論を出発点としているが、Маслов (Ю.С. Маслов) は以上で見た研究社とは異なった、一般アスペクト論の観点からパーフェクトの定義づけを行なっている。

パーフェクトと名づけることができるものは、先行-後続という二つの時間段階が多かれ少なかれ意味において両立しており、しかもこの二つの段階に属する二つの状況の間に何らかの原因-結果の関係が存在するような動詞形態 (あるいは述語的結合) だけである。通常、状況のうちひとつが意味的内容において基本的な形であり、もうひとつが副次的な、時にはぼんやりと描かれたにすぎない形である。…… もし後続の時間段階に重点が置かれているならば、先行の変化、本来の意味での動作に条件づけられたなんらかの状態 (あるいは静的関係) が常に問題となっているのである。このような意味をもつ形式はアスペクト論では「状

9 ニジャルコフ・ヤホントフ (В.П. Недялков, С.Е. Яхонтов) によれば、結果相 (результатив) とは「先行する動作を前提条件とする対象の状態」を示す形式であるとしている (Недялков, Яхонтов 1983: 7)。一方、パーフェクトに関しては「過去における動作の結果が現在に保持されている」ことを示す形式であると規定している (Недялков, Яхонтов 1983: 12)。イサチェンコ、コムリー、ボンダルコ (А.В. Бондарко) のパーフェクトの定義はニジャルコフ・ヤホントフのいう「結果相」と一致することに注意しなければならない。また Князев (1983) では、分詞形受動文の現在時制を「結果相現在 (презент результатива)」と「受動パーフェクト (перфект пассива)」に規定しているが (Князев 1983: 151-152)、Князев (1983) における「結果相現在」と「受動パーフェクト」の規定は、Недялков, Яхонтов (1983) と同じであることにも注意が必要である。結果相とパーフェクトの違いについては、Недялков, Яхонтов (1983: 12-13) を参照のこと。

態パーフェクト (перфект состояния, статальный перфект)」¹⁰と呼ぶ。……もし二つの時間局面のうち先行のものにパーフェクトの重点が置かれているならば、普通中心にあるものは、自身の後に何らかの結果、痕跡を残す本来の意味での動作、何らかの特殊な状況を作る本来の意味での動作、簡単に言えば後続の時間局面にとって何らかの点で顕在的である本来の意味での動作である。この場合、アスペクト論では『動作パーフェクト (перфект действия, акциональный перфект)』と呼ぶ¹¹。

(Маслов 1983: 42-43)

マスロフ (Ю.С. Маслов) のいうパーフェクトは、単一の述語形態で先行-後続という二つの時間局面における状況を複合的に捉えるアスペクト機能として理解できるものであろう。そして重要な点は、マスロフはパーフェクトを、先行の時間局面における動作に重点が置かれ、その後の結果や影響も加味される「動作パーフェクト」、後続の時間局面における動作・変化の結果としての状態に重点が置かれる「状態パーフェクト」の二種類に分類したことである。この定義は、明らかに以上でみた研究社とは異なっていることに注意しなければならない。そしてМаслов (1987) では、パーフェクトを明示的に表現する形式として分詞形受動文を挙げ、その現在時制をパーフェクト専用形式として規定している (Маслов 2001: 197-198)¹²。

(16) Окно открыто целый день. (状態パーフェクト)

(窓が一日中開いている.)

(17) Окно открыто вчера вечером. (動作パーフェクト)

(窓が昨日の晩から開いている.)

一方、過去時制、未来時制においては、Маслов (1983, 1984) では非パーフェクトの、

10 マスロフは、状態パーフェクトは「結果相」にあたるとしている (Маслов 1983: 42-43)。

11 同様のことが、Маслов (1984: 32-33, 2001: 195-196) でも述べられている。

12 分詞形受動文以外に、パーフェクトを明示的に表現する形式として、完了体副動詞、述語形式の動詞派生形容詞が、特定の文脈環境の中で含意的にパーフェクトが表現される形式として、完了体動詞、不完了体動詞過去時制が Маслов (2001) で挙げられている (Маслов 2001: 201-202)。

すなわち過去時制では通常アオリストが、未来時制ではいかなる場合でも完了相未来の意味が表現されるとしていたが（Маслов 1983: 51, 1984: 42），Маслов（2001）ではパーフェクトと非パーフェクトの両方が現れるとし，過去時制では状態過去パーフェクト，動作パーフェクト，動作過去パーフェクト，叙述的アオリストが，未来時制では未来パーフェクト，未来の具体的一回の事実の意味が表現されるとしている（Маслов 2001: 200-201）。以下の（18）が状態過去パーフェクトの例，（19）が動作パーフェクトの例，（20）が動作過去パーフェクトの例，（21）が叙述的アオリストの例，（22）が未来パーフェクトの例である。

(18) Когда я проходил мимо вашего дома, окно рядом с балконом было открыто.

（あなたの家のそばを通っていたら，バルコニーの窓が開いていた。）

(19) Новая станция метро была открыта два месяца назад.

（新しい駅は，二ヶ月前に新設されている。）

(20) Как только дверь была открыта, кошка выскочила на лестницу.

（ドアが開けられるやいなや，ネコが階段に飛び出してきた。）

(21) Когда мы проехали туннель, окно снова было открыто и в купе стало не так жарко.

（私たちがトンネルを通り過ぎると，窓が再び開けられ，車内はそれほど暑くなくなった。）

(22) Когда ты войдешь в комнату, окно уже будет открыто.

（君が部屋へ入ったら，すでに窓は開いているだろう。）

（Маслов 2001: 200-201）

マスロフの議論で重要な点はパーフェクトを 2 種類に分類したこと，そして Исаченко（1960）のいう現在時制の「状態受動」「動作受動」がそれぞれマスロフの「状態パーフェクト」「動作パーフェクト」にあたるということ，分詞型受動構文の現在時制をパーフェクト専用形式として，過去時制と未来時制においてはパーフェクトと非パーフェクトの両方が表現されるとしたことであろう。

4.1.5 Шелякин (1989)

Шелякин (1989) においてはじめて、再帰形受動文とアスペクトとの相関性に関する具体的な記述がみられる。Шелякин (1989) によれば、再帰形受動文のアスペクト的意味の特徴として、再帰形受動文は不完了体の具体的過程 (конкретно-процессное) の意味では使用されず、非限定反復 (неограниченно-кратное)、潜在的恒常性 (потенциально-постоянное)、一般的事実 (обобщенно-фактическое) の意味で使用されるとされる。特に潜在的恒常性の意味が表される場合には、可能／不可能といったモダリティが表現され、これは対応の不完了体能動文では表現することができない再帰形受動文特有の特徴であるとしている (Шелякин 1989: 203)。ただし、Шелякин (М.А. Шелякин) ではこれ以上の具体的な考察がなされておらず、再帰形受動文の実態にせまったものではないといえる。

一方、分詞形受動文については、そのアスペクト的意味は「パーフェクト (перфектное значение)」と「静態 (статив)」を基本としながら、過去時制ではアオリスト的意味、未来時制では未来の具体的一回の事実の意味に傾くとし、現在時制についてはパーフェクト専用形式であるとしている (Шелякин 1989: 199-200, 203)¹³。

4.1.6 Пупынин (1991)

Пупынин (1991) では、Шелякин (1989) においては観察されないとされた再帰形受動文の過程的意味についての考察を行っている。その中で、再帰形受動文の現実的持続の意味¹⁴が、近接未来的な予想や意図を表すいわゆる宣言的用法として使用されることが指摘されている (Пупынин 1991: 213-214)。しかしながらこの宣言的用法というものは不完了体能動文でもしばしば使用され (Маслов 1984: 59-60; 林田 2007: 99-100)、その場合には再帰形受動文との差異化原理を他の要因に求めなくてはいけなくなるだろう。

13 分詞形受動文の現在時制がパーフェクト専用形式であると主張している研究者は他に Падучева (2004) も挙げられる。

14 Пупынин (1991) では「現実的持続」のロシア語訳として процессное という用語をあてている。これは Шелякин (1989) における具体的過程 (конкретно-процессное) の意味と同じであるので、本論では林田 (2007) で使われている「現実的持続」の用語で統一する。

一方、分詞形受動文に関しては、Исаченко（1960）で提案された意味的二分法を踏襲する形で、「具体的事実」と「結果状態」に分けた上で、分詞形受動文におけるパーフェクトの意味はすでに文法的意味のレベルで伝達されているのに対し、完了体動詞能動文ではパーフェクトは文脈、統語－意味的環境、一定の語彙的条件の支えによってのみ表現が可能であることを指摘している（Пупынин 1991: 217-218）。

4.1.7 Храковский (1991)

Храковский（1991）では、再帰形受動文とアスペクトとの相関性に関して、再帰形受動文は具体的過程（конкретно-процессное）の意味では使用されず、非限定反復（неограниченно-кратное）の意味で使用されると指摘している（Храковский 1991: 163）。この指摘は Шелякин（1989）と同じである。他方、不完了体能動文では逆に非限定反復の意味よりも具体的過程の意味で使用されるとしている（Храковский 1991: 163）。ただし、Шелякин（1989）と同様に、これ以上の具体的な考察がなされておらず、再帰形受動文の実態にせまったものではないといえる。

一方、分詞形受動文については、Исаченко（1960）の意味的二分法に従って、「動作受動」と「状態受動」に分けた上で、この「状態受動」に分類されるものは、Недялков, Яхонтов（1983）でいう結果相にあたることを指摘し、Недялков, Яхонтов（1983: 13, 39）を引用して、状態受動文は受動態の特別なケースであり、ヴォイスに対して中立であるとしている（Храковский 1991: 149-151）。また「動作受動」文の現在時制を一律にパーフェクトと規定しているのも注目に値する（Храковский 1991: 160）。

4.1.8 林田（2001, 2011, 2013）

林田（2001, 2011, 2013）は、以上の研究者とは異なり、実際のテキストを考察しながら、分詞形受動文、再帰形受動文に観察される様々な機能を論じている。

まず、林田（2001）ではパーフェクトの概念について以下のように述べている。

パーフェクトにおいては、述語によって表される単一の出来事の、二つの時間段階における展開が表現されるのであり、その意味ではアスペクト的意味として

理解されるものであろう。しかしながら、基本的にはアスペクトの意味でありながら、まさに二つの時間段階をとらえるというその特性によって、パーフェクトはテキストタイプの異なりとの関わりの中で、基本のアスペクトの意味から派生したテンス的要素やタクシスの要素と絡み合っ、様々な機能をみせることになる。

(林田 2001: 96)

つまり、林田はパーフェクトをアスペクトの意味と捉え、そしてそこからテンス的概念、タクシスの概念が派生すると主張しているのである。

林田(2001)では、分詞形受動文の現在時制に関しては、マスコフと同様にパーフェクト専用形式であるとし、「状態受動」が状態パーフェクト、「動作受動」が動作パーフェクトを表すとしている(林田 2001: 93-95)。

一方、過去時制の動作受動文においては、これまでの研究者とは異なり、アオリストの意味よりもパーフェクトの意味の方が優勢であるとしている(林田 2001: 104-107)。そして林田(2001)の議論の中で最も重要な点は、動作受動文のパーフェクトの意味は、不定人称文のパーフェクトの意味と異なり、「論証性」が高くなると指摘していることである。

不定人称他動詞文の後退パーフェクトは、先行の時間段階の出来事への単なる一時的な後退性のみが示されている。一方、「動作受動」文では、先行・後続文脈で述べられている事柄に対する根拠、判断の前提として過去の出来事が導入される、という構造が明らかに認められるのである。

(林田 2001: 109)

林田(2001)の議論でおさえおかなければならないことは、分詞形受動文の主要なアスペクトの意味であるパーフェクトが、現在時制ではパーフェクト専用形式となるが、それが過去時制になってもある程度保持されると指摘していることである。これまで過去時制の動作受動文についてはアオリストの意味が一般的であるとする研究者が多く、その実態というものがあまり明確ではなかったが、林田(2001)の研究は詳細に実際のテキストを分析することで、その実態を明らかにしていったもので、大変意義深い研究であるといえる。

さらに林田（2011）では、これまでの研究で記述されてこなかった分詞形受動文におけるアオリスト機能と、同様の機能をもつとされる語順転換された OVS 語順他動詞能動文との差異化原理を明らかにしている。

【アオリスト受動文】

客体がマクロな物語展開において視点中心軸、拠点となる中心人物である場合に、主語化操作でその中心軸の一貫性を保つ。

【OVS 語順他動詞能動文】

- i) 有標語順文は動作主の焦点化とそれによる新しい事態、人物のテキストへの導入効果をもたらす。事象伝達文は VS 無標語順で事物・人物の存在、出現を表示し、そのことで同じくそれら事物・人物のテキスト導入効果をもたらす。
- ii) 文頭位置の直接目的語はミクロな前後の文脈での結束性を保つ役割を果たす。

（林田 2011: 53）

一方、林田（2013）では再帰形受動文に注目して具体的な考察を行っている。その中で、これまでほとんど使用されないとされた現実的持続の意味について、実際のテキストにおいて頻繁に観察されるとし、アスペクト以外の観点からの再帰形受動文の分析の必要性を説いている。

4.2 まとめと残された課題

以上、現代ロシア語受身文に関する先行研究を概観してきたが、以下の点が明らかになったことと思う。

【分詞形受動文の特徴】

- I：現代ロシア語の分詞形受動文のアスペクト的意味は、状態受動文—状態パーフェクト、動作受動文—動作パーフェクトとアオリストの二種類に分類される。
- II：Iに関連して、現代ロシア語の分詞形受動文は、第3章でみた受動過去分詞の歴史的な発展過程を引き継いでおり、状態受動文においてその痕跡が明確に残され

ている。

Ⅲ：分詞形受動文の現在時制はパーフェクトの専用形式であり，過去時制においてもアオリストよりもパーフェクトが優勢である。

【再帰形受動文の特徴】

I：再帰形受動文の主要なアスペクト的意味は，非限定反復，潜在的恒常性，一般的事実の意味である。特に潜在的恒常性の意味が表現される場合には，可能／不可能といったモダリティが表現され，対応の不完了体能動文の表現と明確に区別される。

Ⅱ：Iに関連して，再帰形受動文は，現実的持続の意味でも使用される。

【先行研究における残された課題】

I：分詞形受動文のアオリスト用法と完了体他動詞不定人称文のアオリスト用法の差異化原理

Ⅱ：再帰形受動文の現実的持続用法と不完了体他動詞不定人称文の現実的持続用法の差異化原理

以下第5章，第6章では，それぞれ分詞形受動文と再帰形受動文を具体的な言語資料を使用して考察していく。

第5章 現代ロシア語の分詞形受動文の諸機能

第5章と続く第6章では、第1章、第3章、第4章でみてきた事実が、実際の運用上においてどのように観察されるかを具体的な言語資料を使って考察していく。

5.1 分詞形受動文のデータ収集, 方法

本論では、言語資料として電子化された現代ロシア語文学作品を使用した¹⁵。使用した作品は、インターネット上で収集可能な作品で、作家特有の文体的特徴が使用されているケースのことを考慮して、特定の作家に偏らないように注意した。またある程度認められた作家の作品を収集するために、日本語に翻訳されている作品に限定した。

現代ロシア語において受身文といわれているものには、完了体他動詞派生の受動過去分詞短語尾形を使用した分詞形受動文と不完了体他動詞派生の再帰動詞を使用した再帰形受動文がある。さらに本論では、第1章で述べたように、ヴォイスとしては能動態に含まれる不定人称文も受身文の一つとして扱う。なお、本論では述語動詞としての受身文のみを考察対象とする。

収集の手順として、まず受動過去分詞短語尾形をもつ分詞形受動文を抜き出した。分詞形受動文は原則として受身の機能のみを担う形式であるため、受動過去分詞短語尾形をもつ形式をすべて受身文と認定した。そこから、語彙として形容詞に完全に転成しているものを除外した。以下の表7は、現代ロシア語短・中・長編小説8作品におけるワード数と分詞形受動文の数を表したデータである。得られたデータは、総ワード数 275,125、分詞形受動文 642 例である。

次節以降、とりあえず先に見た分詞形受動文の意味的二分法である状態受動文と動作受動文の概念に従って、論を進める。

15 URLは巻末の例文出典を参照のこと。2016年12月15日時点で、一部の作品の閲覧ができなくなっているので注意が必要である。

表7 分析対象作品におけるワード数と分詞形受動文の頻度数

作品名	ワード数	分詞形受動文
Ч. Айтматов. «Белое облако Чингисхана»	25,989	69
Ч. Айтматов. «Джамиля»	15,199	18
Ч. Айтматов. «Первый учитель»	16,197	27
М. Булгаков. «Мастер и Маргарита»	118,088	331
Б. Окуджава. «Похождения Шипова»	58,633	134
Л. Петрушевская. «Свой круг»	8,392	21
В. Распутин. «Деньги для Марии»	30,486	33
Т. Толстая. «Ночь»	2,141	9
計	275,125	642

5.2 分詞形受動文の動作主項

5.2.1 動作主項データ

これまでの先行研究において、ロシア語の受動文における造格形による動作主表示の頻度について、「動作主補語をもつ三項受動文の使用頻度はまれであり、動作主項をもたない二項受動文が頻度としては圧倒的に高くなる（Бондарко, Буланин 1967: 168, 173-174; Пупынин 1991: 214-215）」ということが指摘されてきたが、実際のテキストにおいて分詞形受動文の造格による動作主項表示の頻度は本当に少ないのかを検証する。以下の表8は表7で得られたデータをもとに、各作品における分詞形受動文に占める造格形による動作主項の割合を示したものである。

表8 各作品における分詞形受動文に占める動作主項の割合

作品名	分詞形受動文	動作主項
Ч. Айтматов. «Белое облако Чингисхана»	69	15
Ч. Айтматов. «Джамиля»	18	1
Ч. Айтматов. «Первый учитель»	27	5

М. Булгаков. «Мастер и Маргарита»	331	36
Б. Окуджава. «Похождения Шипова»	134	16
Л. Петрушевская. «Свой круг»	21	3
В. Распутин. «Деньги для Марии»	33	2
Т. Толстая. «Ночь»	9	1
計	642	79

表 8 から明らかなように、分詞形受動文において造格形による動作主項表示は必須ではないということがわかる。各作品の分詞形受動文のうち動作主項表示をもつものは多いもので 21%、少ないもので 5%、平均で 12% しかなく、これは頻度としてはかなり少ないと結論づけることができるであろう。

さらに以下の表 9 は、上記で得られた全 79 例の動作主項をもつ分詞形受動文を、主語と動作主項に注目して、それぞれヒトと事物に分類したものである。

表 9 分詞形受動文の主語と動作主項

	総数	動作主項	
		ヒト	事物
主語名詞句がヒト	43	10	33
主語名詞句が事物	36	13	23
計	79	23	56

これまでのロシア語受身文研究では、「分詞形受動文は事物名詞を主語とする文が典型的であり、そのような受動文が造格形動作主項をもつ場合、その動作主項はヒト名詞が典型的である」（Бондарко, Буланин 1967: 178）としていたが、表 9 から明らかなように、ヒト名詞を動作主項にもつ分詞形受動文は全 79 例中 23 例（29%）に対し、事物名詞を動作主項にもつ分詞形受動文は全 79 例中 56 例（71%）にのぼり、後者の方が頻度としては圧倒的に高くなっており、先行研究とは違う結果となっている。一方、主語名詞句に注目すると、分詞形受動文において動作主項表示があるときの、主語がヒト名詞である場合は 43 例、事物名詞は 36 例であり、ほぼ同じ比率になっていることがわかる。

このように、本来動作・作用を対象に及ぼすことのない事物名詞がなぜ高い頻度で分詞形受動文の動作主項として現われるのであろうか。それは、本来の意味である意志性をもつ動作主として表現されていない可能性が高い。また、動作・作用を対象に及ぼすヒト名詞が分詞形受動文の動作主補語としてあまり現われないのは、やはり動作主としてのヒトを主語に据え、そこから出来事を描く他動詞能動文の使用が一般的であるということが示唆される。

5.2.2 受動文主語－ヒト，動作主項－事物

まず、分詞形受動文の主語がヒト名詞で動作主補語が事物名詞である場合には、明らかな傾向として、以下の(23)、(24)のように、元の完了体他動詞が「喜ばせる」、「満足させる」、「驚かせる」、「感動させる」のような人間の心理状態・精神状態を意味する動詞から派生された受動過去分詞が使用されている。

(23) На станции я все-таки спросил ее:

- Алтынай Сулаймановна, вы чем-то расстроены, может, мы обидели вас?

- Ну что вы! И не смейте так думать! На кого я могла обидеться? Разве что на себя. Да, на себя можно было, пожалуй, обидеться.

«Первый учитель»

(プラットホームで私は意を決して聞いてみた。「アルティナイ・スライマノブナさん、あなたは気を悪くなさったのじゃありませんか? 私たちが何かよくないことでも……」

「とんでもありません! そんなふうに考えられては私が困ります。誰かに腹を立てたなんて! 反対ですよ。自分自身に腹を立てたといった方が妥当でしょう」)

(24) Философствуя обо всем этом, поскольку в партшколе когда-то кое-что слышал о классических учениях, сидя за столом рядом с женой, от которой, казалось бы, трудно укрыть мысли, успевая кивать и поддакивать соседям в общем разговоре, Тансыкбаев восхищался втайне тем, как чудесно устроен человек. Вот, к примеру, он сидит в компании, в званных гостях, делает вид, будто целиком и полностью

поглощен значимостью этого момента, а сам думает совершенно о другом.

«Белое облако»

(かつて党学校で古典的な教義の講義を聞いたことの名残かもしれないが、こういったことすべてについて思索にふけりながら、妻と並んですわり、妻には心の裏すらも隠すことができないことを感じつつ、タンシックバーエフはその場の共通の会話に加わって、うなずいたり、隣の人たちに相槌を打ったりしながら、人間がいかにすばらしいものであるかということに心底から驚き、心ひそかに感嘆していた。たとえば、彼は招待客の一人として大勢の仲間とともにすわり、この祝賀の意義深さに身も心も感動しているようなふりをしているが、自身はまったく別のことを考えているのである。)

この場合の分詞形受動文では、そこに現われる動作主は、「喜ぶ」、「満足する」などの心理状態・精神活動を誘発するもの、すなわちそれらの原因・源となる物事の意味が表現されている。このような心理状態・精神状態を意味する完了体他動詞はもともと主語として事物名詞をとり、目的語としてヒト名詞をとるものである。またこれらの受動文は、意味的にそれぞれ再帰動詞 *расстроиться* (がっかりする)、*поглотиться* (夢中になる) に対応している。林田 (2000, 2005) でも指摘されているが、ロシア語の-н-/-т-形述語のうちの多くが、再帰動詞を中心とした非他動詞に相関し、このような述語は主語自身の質的变化、感情変化、自己自身への動作などの結果状態を表し、そこに何らかの外在的な作用、動作主の存在は見出し得ないのである (林田 2000: 34-35; 2005: 221-223)。それらに相関する受動過去分詞の多くが、今日、辞書では形容詞と過去分詞の両方にまたがるものとして扱われており、そのことからこれらの受動文が単なる心理状態を表わしているのにすぎないことがわかるであろう。

5.2.3 受動文主語—事物，動作主項—事物

次に、分詞形受動文の主語が事物名詞で動作主補語も事物名詞である場合を見ていく。こちら明らかに、動作主項で指示される事物名詞は本来の意味での動作主としてではなく、状態受動文として理解されるところの、その状態成立にとって不可欠な構成物として表現されるという傾向がみてとれるのである。

(25) Тут в его воображении возникла Дася в чем-то голубом, прозрачном, таинственном, как она утопает в перине, как разметала белые руки, грудь ее высоко вздымается, спальня наполнена ароматом духов (куды Матрене-то!..), едва слышным, легким звоном пружин, откуда-то из глубины, из тумана, губки горячие, еще горячее, чем в тот раз, и покуда в мире идет суета, кто у кого цапнет побольше, торопись, Шипов!...

«Похождения Шипова»

(その時、想像裡に浮かび上がったのは、何やら青くて透き通った神秘的なものを身にまとったダーシャの姿だった。羽根ぶとんの中に埋まり、白い両手を投げ出しているダーシャ。その胸は高く盛り上がり、寝室は香水の馥郁たる匂いに包まれいて (マトリョーナなんか比べものにならん！……)、どこか奥深く、霧の中からスプリングの音がかすかに聞こえてくる。唇は熱く燃え、いつかの時よりももっと熱いくらいだ。そして、世間の人たちが少しでも多く他人からぶんどってやろうとあくせくしているうちに、急ぐんだ、シーポフ！……)

(26) Очень хорошо! Вот так она завоет: у-у-у-у!

- Тише, тише, Алексей, успокойся!

Небо все засыпано звездами. Они знакомы Алексею Петровичу: маленькие сияющие бисеринки, сами по себе висящие в черной пустоте.

«Ночь»

(とてもいいや！ あらしは、ウーウーウーウーって、ほえるんだ！

「静かに、静かにしなさい、アレクセイ、おとなしくしなさい！」

空一面、星で一杯だ。アレクセイ・ペトローヴィチは星たちのことを知っている。

きらきら輝くこのちっちゃなビーズたちは、暗い空洞に自分でつりさがってるんだ。)

(25), (26) は分詞形受動文で観察される典型的な状態受動文の例である。すでに第3章でみたように、-н-/-т-形過去分詞は歴史的に、動作主による動作表現として機能しているのではなく、動作主的な要素を一切排除したうえで、客体における動作の結果状態を表現してきた形式であり、その機能が現代ロシア語でも色濃く残していることの証しとなる例であろう。

5.2.4 受動文主語ーヒト, 事物, 動作主項ーヒト

さて, 分詞形受動文の動作主補語がヒト名詞の場合には, 主語がヒトであっても事物名詞であっても, 用例データ 23 例すべてが本来の意味での動作主の意味として出現しており, 動作受動文として認定された. 次の(27)が受動文主語がヒトの例, (28)が受動文主語が事物名詞の例である.

(27) Довожу до Вашего сведения, что М. Зимин замечен мною проводящим время в Москве, вместо того чтобы срочно отправляться в г. Тулу по распоряжению Их Сиятельства Господина Генерал-Маиора Крейца.

Сознавая всю важность операции, считаю своим долгом поставить о том в известность Ваше Высокоблагородие.

«Похождения Шипова»

(М・ジミーンなる者, 陸軍少将クレイツ閣下殿の御訓令に依りて, 至急トゥーラ市に向け出発すべきを, 未だにモスクワに滞留中のところを本官に 発見されましたことを, ここに御報告申し上げます.

本作戦の重要性に鑑み, 中佐殿に御通報申し上げるのを本官の義務と考える次第であります.)

(28) Чингисхан с досадой думал о том, что эта история недостойна его высокого внимания, но поскольку запрет на деторождение установлен им самим и поскольку каждый из войсковых старшин, боясь за свою голову, спешил донести о случившемся вышестоящему, то он, хаган, оказался заложником собственного высочайшего повеления. Отступить от своего повеления он не мог. И кара была неминуема...

«Белое облако»

(この事件は王たる者がみずから乗り出すべきことではない, とチンギス・ハンはいまましい気持ちで思いました. しかし子供を産むことを禁止したのは かれ自身であり, また各部隊の隊長は自分の首惜しさに事件をことごとく上官に報告しているはずで
す. とすれば, チンギス・ハン自身が自分の命令の人質になってしまっているのです.

命令を撤回することはかれにはできませんでした。となれば、処罰は避けられません…
…)

このようにみてくると、本当の意味での受身文たるものは、642 例中わずか 23 例だけだということができる。これは全体のわずか約 3.6%である。次節の 5.3 でも述べるが、この事実から、-H-/-T-形分詞そのものが未だに受動態の機能をほとんど持ち得ていないのではないかという疑問さえ浮かんでくる。確かに分詞形受動文は動作主項表示に制限がないので受動態だということができるし、あとで見るように動作主項が表示されない動作受動文が観察されるので受動態だということができる。しかしながら、上記の事実、すなわち「動作主項で表されるものは本来の意味での動作主ではない」ことや、「動作主項が表示されていたとしてもそれは多く状態受動文として理解される」ことが、取りも直さずこの構文が受動態ではないという証になるだろう。

5.3 分詞形受動文のAspect意味・機能

5.3.1 Aspectデータ

分詞形受動文で観察されるAspect意味・機能は、すでに第 4 章でみたように、「状態受動」、「動作受動」という伝統的な意味的二分法にならえば、状態受動文においては状態パーフェクトが、動作受動文においては動作パーフェクトとアオリストの二つの意味が担うことになる。以下の表 10 は、5.1 で収集した分詞形受動文全データ 642 例を、状態パーフェクト、動作パーフェクト、アオリストに分類したときの頻度数を表したものである¹⁶。

表 10 分詞形受動文におけるAspect別頻度数

状態パーフェクト	動作パーフェクト	アオリスト	計
376	179	87	642

16 状態受動文、動作受動文それぞれの成立条件については林田（2001）に詳しい。

表 10 から観察されることは、分詞形受動文では状態パーフェクトが圧倒的に多く、動作パーフェクト、アオリストの順に頻度が減っていくということである。分詞形受動文全データのうち 6 割近くを状態受動文－状態パーフェクトが占めているという事実は、-Н-/-Т-形過去分詞のももとの「動作の結果状態」という機能を現代ロシア語においても色濃く残しているということを証明しているのである。また、この分詞形受動文の機能がちょうど完了体動詞能動文の多くがアオリスト的意味で使用されるのと正反対な関係になっているという事実も見逃せない。つまり、完了体他動詞能動文は意味的中心環をすでにアオリストへと大きくシフトしており、パーフェクトの意味は部分的にしか表さないが、分詞形受動文は逆にパーフェクトを中心に表現する形式であり、アオリストの意味は一部でしか観察されないということである。このようにみえてくると、分詞形受動文における受動態の機能は一部分でしか担っていないという結論が導き出せるだろう。

5.3.2 状態パーフェクト

パーフェクトとは、単一の述語形態で先行－後続という二つの時間局面における状況を複合的に捉えるアスペクト機能である。そしてパーフェクトは、先行の時間局面における動作に重点が置かれ、その後の結果や影響も加味される「動作パーフェクト」、後続の時間局面における動作・変化の結果としての状態に重点が置かれる「状態パーフェクト」の二種類に分類される（Маслов 1983: 42-43; 工藤 1995: 104-107）。パーフェクトの歴史的な発展過程についてはすでに Маслов（1984: 32-41）、林田（2007: 116）などで述べられているので本論では割愛するが、パーフェクトは始原的には純粹状態を表す状態カテゴリーを出発点としており、そこから状態パーフェクト→動作パーフェクト→アオリストへと変遷していったという事実だけは指摘しておきたい。

さて、以下の (29) - (31) は状態パーフェクトを表す例文である。

- (29) Как-то раз, возвращаясь с полными мешками кизяка, который обычно собирали в предгорье над аилом, мы завернули к школе: интересно было посмотреть, что там делает учитель. Старый глинобитный сарай прежде был байской конюшней. Зимой здесь держали кобыл, ожеребившихся в ненастье. После прихода Советской власти бай куда-то откочевал, а конюшня так и

осталась стоять. Никто сюда не ходил, а все вокруг поросло репьем да колючками. Теперь сорняки, вырубленные с корнем, лежали в стороне, собранные в кучу, двор был расчищен. Обвалившиеся размытые дождями стены были подмазаны глиной, а скособоченная, разошедшаяся дверь, вечно болтавшаяся на одной петле, оказалась починенной и прилаженной на место.

«Первый учитель»

(あるとき、わたしたちは、いつものように村の背にあたる山の近くで馬糞を袋いっぱいあつめて帰る途中、学校に寄ってみました。先生がなにをしているのか、知りたかったのです。古ぼけた粘土づくりの小屋は、昔は、地主の馬小屋でした。冬ここで、悪天候のときに子を産んだ雌馬を飼っていたのです。ソビエト政権の時代がやってくると、地主はどこかにいってしまい、馬小屋だけ残ったのでした。ここに来る者はなく、小屋のまわりは、ゴボウやイラクサがぼうぼうとはえていました。でもわたしたちが行ったときは、根っこからもぎとられた雑草が、一かたまりになって脇の方に積まれていたし、空き地もきれいに掃除されていました。雨に洗われて崩れ落ちた壁は、粘土で塗りなおされていましたし、斜めに傾き、一本の蝶つがいにとめられているだけでぶらぶらしていた、あちこちすきまのできていたドアは、修理されていて。ちゃんと元の場所にくっついていました。)

(30) Самое главное - не волнуйся на очной ставке, гляди в глаза и говори все, как есть. Попов - резидент, с...сорок...четвертого года завербован английской разведкой, перед депортацией был на совещании у самого Тито, имеет долгосрочное задание на случай волнений. Все, этого достаточно.

«Белое облако»

(肝心なことは、対決尋問で動揺しないことだ。相手の眼をじっと見すえて、すべてをありのままに言うことだ。ポポフはスパイ組織の首領で、1944年からイギリスの諜報機関に雇われ、帰国前にはチトー自身と打ち合わせをして、暴動を想定しての長期にわたる任務を受け取っている。それでいい。それだけあれば十分だ。)

(31) - Мне обноски свои донашивать до самой смерти хватит. А ежели выпить, то я аппарат сооружу и такого накапаю, что огнем гореть будет, не хуже твоего

спирту. Я за весь свой век сколь раз деньги в руках держал - по пальцам сосчитать можно, я с малолетства был приучен все сам делать, на свои труды жить. Когда надо, и стол сколочу и катанки скатаю. ...

«Деньги для Марии»

(ボロ着なら、わしゃ死ぬまでかかっても着尽くせねえほど持っているだ。飲む方だって、仕かけをこしらえて火をつけりゃ燃えあがるようなやつをどっさり作ってみせらあ。おめえが飲むアルコールに負けねえやつだ。生まれてこの方わしが金を握ったことなんぞ、何度あつただか一両手の指で数えられるくれえのもんだ。わしはがきの頃から、何でも自分でつくる癖がついてるだ。自分の手でつくって暮らすことに慣れてるだ。必要とありゃ、机も組み立てるし、フェルト長靴もこしらえる。……)

(29) は、過去の変化の瞬間ではなく、空き地が掃除されてきれいになった状態、壁が粘土で塗りなおされてきれいになった状態に着目した文であり、「以前と比較して判断した今の状態」(林田 2007: 114) を記述した典型的な状態パーフェクトの例である。他方(30) は、事物名詞を動作主項(____部分)としてとる受動文であるが、ここではポポフという人物の肩書を語っている文であり、前後の文脈で不完了体動詞の使用が確認され、かつ持続期間を示す「1944 年から(____部分)」という時の状況語の存在から状態パーフェクトと認定される受動文である。(31) も持続期間を示す「がきの頃から(____部分)」という時の状況語の存在から状態パーフェクトと理解できるものであるが、ここで使用されている過去分詞(____部分)は、すでに 5.2.2 でみたように、意味的に再帰動詞 приучиться (慣れる) に対応しており、単純状態に近い用法として捉えることができるだろう。

5.3.3 動作パーフェクト

状態パーフェクトに対して、動作パーフェクトは先行の時間局面における動作に重点が置かれ、その後の結果や影響も加味する用法である。以下の(32) - (34) は動作パーフェクトを表す例文である。

(32) -- Так, так. А почему именно там?

-- Игемон, по моим соображениям, Иуда убит не в самом Ершалаиме и не где-нибудь далеко от него. Он убит под Ершалаимом.

«Мастер и Маргарита»

(「なるほど, なるほど. だが, その根拠は?」)

「閣下, 私の考えますところ, ユダが殺されたのはエルサレムのなかではありませんし, どこか遠く離れたところでもありません. エルサレム近郊で殺されたのです。」

(33) Господин Зимин все время пребывания своего в Туле вел разгульную, нетрезвую жизнь, посещая трактиры низшего разряда, и наконец дошел до такой крайности, что оскорбил беззащитную почтенную женщину, вдову капитана Каспарича, за что и был изгнан ею из ее дома.

«Похождения Шипова»

(ジミーン氏はトゥーラ滞在中は絶えず, 最下等の酒場に出入りして放埒な酒びたりの生活を送り, その挙句には, か弱い尊敬すべき女性, すなわちカスパリッチ大尉未亡人を侮辱するという極端な行動に走り, その結果同未亡人の家を追い出された次第であります.)

(34) Однако сам он, Чингисхан, зная об этом, исподволь наблюдал за тем облаком и все больше убеждался, что это действительно знак воли Неба-Тенгри.

Появление облака было предсказано неким странствующим прорицателем, которому Чингисхан однажды дозволил приблизиться к себе. Тот чужеземец не пал ниц, не льстил, не пророчествовал в угоду.

«Белое облако Чингисхана»

(しかしチンギス・ハン自身はそのことを知っていて, その雲を注意して眺めているうちに, それが本当にテンゲリ (天神) の意志の表現であることをしだいに確信するようになりました.)

雲の出現は, とある放浪の予言者によって 予告されていたものです. あるときチンギス・ハンはその男に拜謁を許したのです. そのよそ者はひれ伏すこともせず, へつらいもせず, ご機嫌とりの予言もしませんでした.)

(32), (33) はいずれも発話時点と状況に関わりのある過去の動作を導入するという動作パーフェクト本来の意味が表現されている。一方, (34) はパーフェクトのタクシス機能を表した「逆行用法」と呼ばれるものである。逆行用法については Маслов (1984: 186), 林田 (2005: 278-280) で述べられているが, 目下進行している状況に関わりのある, それ以前の出来事への逆行を表したもので, テクストの事象配列を変更する手法である。そしてこの (32) - (34) において共通する点は, その過去の動作が判断・根拠として持ち出されているということである。

5.3.4 アオリスト

アオリストとは, パーフェクトと同じく, 古スラヴ語における 4 つの過去時制 (アオリスト, パーフェクト, プルパーフェクト, インパーフェクト) の一つで, ロシア語では体の発達によってそれらの 4 つのタイプが完了体/不完了体に集約されていくのであるが, 本来の意味は「時間的意義をもたず, 出来事一般をあたかも名指すかのようにその存在を確認する機能 (林田 2007: 38)」である。つまり, そこでは動作態的な観点というものが一切捨象され, 行為の出現, 生起が一括して点的に捉えられるのである。従って, アオリストは, 過去の逐次連続的に推移する行為の事実の展開を描写するために使用されることが多い。以下の (35), (36) も典型的な出来事展開を描いた複数の文の中で受動文 (____ 部分) が使用されており¹⁷, (35) はヒト名詞句を動作主項としてもつアオリスト受動文と動作主項をもたないアオリスト受動文, (36) は動作主項をもたないアオリスト受動文の例である。

(35) Колонна тронулась. Совершенно больной и даже постаревший поэт не более чем через две минуты входил на веранду Грибоедова. Она уже опустела. В углу допивала какая-то компания, и в центре ее суетился знакомый конферансье в тюбетейке и с бокалом "Абрау" в руке.

Рюхин, обремененный полотенцами, был встречен Арчибальдом Арчибальдовичем очень приветливо и тотчас избавлен от проклятых тряпок. ...

17 以下, アオリスト機能をもつ分詞形受動文のことをアオリスト受動文とする。

«Мастер и Маргарита»

(渋滞していた車の列が動きはじめた。すっかり病人のようになり、少し老けこんだようにさえ見えた詩人は、二分も経たないうちにグリボエードフのテラスに入った。そこは、もうがらんとしていた。隅のほうで何人かの者が酒を飲み終えようとしていたが、そのまんなかで、トルコ帽をかぶり、アブラウ・ワインを注いだグラスを片手にはしゃぎまわっているのは、顔見知りの司会者だった。

山のようなタオルを抱えたリュウヒンは、アルチバリド・アルチバリドヴィチに愛想よく出迎えられ、すぐに呪わしいぼろ布から解放された。……)

(36) И оба подхватили администратора под руки, выволокли его из сада и понесли с ним по Садовой. Гроза бушевала с полной силой, вода с грохотом и воем низвергалась в канализационные отверстия, всюду пузырилось, вздувались волны, с крыш хлестало мимо труб, из подворотен бежали пенные потоки. Все живое смылось с Садовой, и спасти Ивана Савельевича было некому. Прыгая в мутных реках и освещаясь молниями, бандиты в одну секунду доволокли полуживого администратора до дома N 302-бис, влетели с ним в подворотню, где к стенке жались две босоногие женщины, свои туфли и чулки держащие в руках. Затем кинулись в шестой подъезд, и близкий к безумию Варенуха был вознесен на пятый этаж и брошен на пол в хорошо знакомой ему полутемной передней квартиры Степы Лиходеева.

«Мастер и Маргарита»

(それから二人は、ヴァレヌーハの腕を両側から抱きかかえて庭から連れ出し、サドーワヤ通りを突進した。雷雨はすさまじい勢いで荒れ狂い、雨水は轟音と唸りをあげて下水管に落ちこみ、いたるところで泡立ち、波打ち、屋根からは雨樋があふれてほとぼしり、門の下からは泡を立てて逆巻く奔流が走り出ていた。生きとし生けるものはすべてサドーワヤ通りから姿を消し、ヴァレヌーハを救い出してくれる者は誰もいなかった。濁った川をつぎからつぎと跳び越え、稲妻に照らし出されながら、悪党どもはまたたくまに半死半生のヴァレヌーハを三〇二番地のアパートまで引きずっていき、靴とストッキングを両手に持った裸足の女が二人、壁にぴったりと身を寄せていた門の下に跳びこんだ。それから六番玄関に突進し、いまやほと

んど意識を失いかけていたヴァレヌーハは五階まで抱きかかえられるようにして運ばれ、よく知っているリホジェーエフの住居の薄暗い玄関ホールに投げ出された。)

上記のアオリスト受動文の場合、同じ機能をもつとされる他動詞能動文との競合の問題が発生するが、このことについて先行研究ではほとんど取り上げられていない。次節では、アオリスト受動文と同じ機能をもつ完了体他動詞不定人称文¹⁸を分析対象として、アオリスト機能をもつこれら2つの表現形式の差異化原理について明らかにする。

5.4 分詞形受動文と不定人称文の差異化原理

すでに上で述べたように、完了体他動詞能動文と分詞形受動文には明確なアスペクト機能の対立が観察される。完了体他動詞能動文はアオリストというアスペクト的意味を明確に表現する形式であるのに対し、分詞形受動文はパーフェクトの明示的な表現形式として使用される。一方でこれら2構文が同じアスペクト機能をもつ場合、特にアオリスト機能上で起こる両構文の競合の問題は先行研究ではほとんど示されていない¹⁹。

動作主項が共起する場合のアオリスト受動文についてはすでに林田(2011)で詳細に考察されている。一方、動作主項が共起しないアオリスト受動文については先行研究ではその存在の指摘のみに留まっている(Маслов 2001: 201)。

(37) Когда мы проехали туннель, окно снова было открыто (= открыли) и в купе стало не так жарко.

(私たちがトンネルを通り過ぎると、窓は再び開けられ、車内はそれほど暑くなくなった。)

(Маслов 2001: 201)

(37) は出来事の継起的展開が述べられた典型的な動作主項をもたないアオリスト受動

18 5.4 では、特に断わりのない限り「完了体他動詞不定人称文」のことを、単に「不定人称文」とする。

19 同じパーフェクト機能をもつ不定人称文と分詞形受動文の差異化原理は林田(2001)を参照のこと。

文である。通常、動作主項表示のない分詞形受動文は、完了体他動詞不定人称文をヴォイス変換したものである。マスロフ（Маслов）は、この例文において「было открыто 開けられ（__部分）」は不定人称文の открыли に書き換えが可能であるとし、その他の先行研究（Русская грамматика 1980; Шелякин 1989: 195）でも同様の指摘が見られる。

しかし、分詞形受動文と不定人称文が同一の機能を担うならば、受動化作業を伴う分詞形受動文ではなく不定人称文を使用すればよいはずである。実際のテキストにおいて不定人称文ではなく分詞形受動文が選択される場合には、やはり両構文に対して異なる説明がなされなければならない。

以下、アオリスト受動文が多く観察される書き言葉（現代ロシア語文学作品）を分析データとして、完了体他動詞不定人称文との差異を、視点、潜在的動作主情報、受動文の主語／不定人称文の動作対象名詞句情報、テキスト機能の観点から考察する。

5.4.1 不定人称文の形態・統語的特徴及び潜在的動作主について

先行研究において、受動文の主要な機能として、「客体主題化機能」や「動作主非焦点化」といった点がしばしば挙げられるが（東郷 1994: 293）、ロシア語のような比較的自由に語順が組める言語の場合、前者は直接補語を文頭に配置することで表され、後者もロシア語の場合には他動詞不定人称文で代用が可能である。

不定人称文とは、構造上主語名詞句がなく、動詞が3人称複数の形態をとり、誰が動作を行うかが不明または重要ではなく、話者が明示したくないときに広く使用される構文である。以下の(38)のように想定される動作主が3人称単数であっても——(38)では通常は母親（または父親）が動作主として想定される——使用可能であり、さらには(39)のように3人称ではなく話者自身が想定される場合もある。

(38) Ребёнка пеленяют и укладывают в постель.

（赤ん坊はおむつをしてもらって、ベッドに寝かされる。）

(39) Не хочу я, говорят тебе! - возразила Настенька. (Писем.)

（「私は嫌や、あんたに言っているのよ」とナーステンカは答えた。）

（山口 1995: 163）

受動文と不定人称文の統語的特徴を見れば、受動文では能動文の動作主が主語の地位から降格または消去され、被動作主が直接目的語の地位から主語へと昇格される。一方、不定人称文では本来の受動文では主語へと昇格される被動作主が直接目的語のままであり、さらに主語は統語上表示されない。しかし被動作主である直接目的語が主語に昇格しないため、統語的な操作は行われない。形態的特徴についても、受動文ではヴォイス変換に伴い動詞形態も分詞形受動文は過去分詞に、再帰形受動文は再帰動詞に変更されるが、不定人称文については受動文で観察されるような形態変更は行われない。つまり、不定人称文は形態的・統語的にみれば能動態である。

さらにもう1つの重要な特徴として、不定人称文の潜在的動作主は原則として人間に限定されるが、分詞形受動文の動作主にはそのような制限がないということが挙げられる。

(40) Лодку опрокинули. (小舟はひっくり返された.)

(41) Лодка была опрокинута. (小舟はひっくり返された. / ひっくり返っていた.)

Храковский (1991)によれば、上の(40)の不定人称文では話者以外の人間の動作主のみが想定可能であるのに対し、(41)の分詞形受動文では具体的に「誰が小舟をひっくり返したか」については一切含意されておらず、船の状態のみが描かれており、そこでは話者を含めた人間、動物、自然の力等、あらゆる動作主が想定可能であるとしている(Храковский 1991: 168)。

このフラコフスキーの指摘は、不定人称文には動作主のイメージがあるが、分詞形受動文にはそのようなイメージがないと言い換えることができるだろう。そしてそのような理解は、外からの人為的な働きかけの強弱に関係するのではないかと考えられるが、このことに関しては5.4.3で考察することにして、とりあえずここでは、①不定人称文の形態・統語的特徴、②潜在的動作主の制限の有無が、分詞形受動文と不定人称文の構文選択に影響を与える重要なファクターになりうるということを強調しておく必要があるだろう。

5.4.2 分詞形受動文のアオリスト用法

5.4.2.1 主題の一貫性

アオリスト受動文が動作主項をもつ場合、客体主題化機能という点で、直接補語を文頭に配置した OVS 語順完了体他動詞能動文との機能上の重なりが問題となるが、これら 2 つの構文の差異については林田（2011）で明らかにされている。

- (42) 動作主項が共起するアオリスト受動文は、客体がマクロな物語展開において視点中心軸、拠点となる中心人物である場合に、主語化操作でその中心軸の一貫性を保つ機能をもつ。
- (43) OVS 語順他動詞能動文における有標語順文は動作主の焦点化とそれによる新しい事態、人物のテキストへの導入効果をもたらす。事象伝達文は VS 無標語順で事物・人物の存在、出現を表示し、そのことで同じくそれら事物・人物のテキスト導入効果をもたらす。文頭位置の直接目的語はマイクロな前後の文脈での結束性を保つ役割を果たす。

（林田 2011: 53）

林田の指摘を簡単にまとめると、OVS 語順他動詞能動文の使用動機は客体のテーマ化ではなく動作主のテーマ化である。OVS 語順他動詞能動文は動作主の文末配置による動作主強調というまったく別の動機で使用される。従って、アオリスト受動文が動作主項を伴う場合には、客体の主題化機能は受動文のみが担う。

一方、動作主項が共起しないアオリスト受動文と不定人称文の関係になると、上記とは異なるファクターが働くようである。以下の(44)(45)の下線部（ 部分）は、それぞれアオリスト受動文と不定人称文である。(44)では、受動文主語で表されている登場人物「бык Мигуэль雄牛ミゲル（ 部分）」は、物語の中心的な役割を与えられ、ミゲルの視点から事態の展開が刻々と描かれている。そして受動文のところで、主語化操作を行うことで、ミゲル寄りの視点からミゲルに起こった状況が描写されている。また(45)においても同様の現象が観察され、不定人称文のところで、直接目的語「Ивана Николаевича

イワン・ニコラエヴィチ (____部分)」を動詞の前に配置することで²⁰、イワン寄りの視点から事態が描写されている²¹。

(44) Тем временем принципский бык Мигуэль самолетом прибыл в Мадрид. Уж на что он вчера стал неприятен местным жителям, а теперь, после ночных переплетов и нуакшотского сидения, его встречали как родного. С гитарами, с кастаньетами. Бык опять лежал, лишь иногда поднимал голову и смотрел на публику мутным глазом. Однако теперь в его позе и взгляде виделось нечто царственное. Вынесли его из самолета на специальных носилках человек двадцать - все атлеты. Данилов при этом опять пожалел бедняг террористов, в особенности японца или филиппинца. Тут же бык Мигуэль был снова водружен на орудийный лафет и в сопровождении мотоциклистов мадридскими пласами и авенидами благополучно отправлен в предназначенную ему резиденцию.

«Альтист Данилов»

(そうこうしているうちにプリンシペ島の雄牛ミゲルが飛行機でマドリードに到着した。昨日はマドリード市民の敵だったとはいえ、真夜中のとんだ災難とヌアクショットでの拘禁を経た今や、ミゲルは身内として迎えられた。ギターとカスターネットでお出迎えである。雄牛はまたしても横たわったままで、ただ時折首を持ち上げ、ぼんやりとした眼差しで人々を見た。しかし今や彼のポーズと眼差しにはどことなく勝ち誇っているようなところがあった。特別製の担架に載せられ、雄牛をおよそ二十人がかりで飛行機から運び出した。担ぎ手は皆、大男のスポーツマンである。ダニーロフはこれを見て再び、哀れなテロリストたちのことが、特に例の日本

20 以下、特に断わりのない限り、不定人称文で直接目的語を動詞の前に配置したものを「OV語順」、直接目的語を動詞の後ろに配置したものを「VO語順」とする。

21 例文(45)における不定人称文の動作対象名詞句は、後で見る 5.4.3.1 の例文(52)や 5.4.3.2 の例文(46)と同様に、文頭位置にはなく、一見すると主題の役割を担っていないかのように思われる。しかしながら、(45)では Ивана Николаевича が後続文で主格主語 Иван として文頭位置を占めることで、(46)、(52)では後続文で動作対象名詞句を人称代名詞 он で照応することで、いずれも主題が継続されており、不定人称文では狭義の文頭でなくとも、動詞に先行するかしないかがむしろ主題の継続効果に深く関係があるようである。

人だかフィリピン人だかが、気の毒になった。すぐさま雄牛ミゲルは再び砲架の上に高く掲げられ、オートバイを従えてマドリードの目抜通りや大通りを通して、彼に与えられることになっている邸へと運ばれた。）

(45) Прикрепленный к новому жилищу насильственно, Иван едва руками не всплеснул от развязности женщины и молча ткнул пальцем в пижаму из пунцовой байки.

После этого Ивана Николаевича повели по пустому и беззвучному коридору и привели в громаднейших размеров кабинет. Иван, решив относиться ко всему, что есть в этом на диво оборудованном здании, с иронией, тут же мысленно окрестил кабинет "фабрикой-кухней". «Мастер и Маргарита»

(新しい住居に囚人のように無理やり押しこめられたイワンは、打ちとけた女の態度には気をよくして、思わずぽんと両手をたたきそうになったが、なにも言わずに、深紅のフランネルのパジャマを指さした。

このあと、イワンはがらんとして物音ひとつしない廊下を通って、だだっ広い部屋に連れて行かれた。驚くべき設備を誇るこの建物にあるすべてのものに皮肉な態度をとろうと決心して、このときも、この部屋を「大食堂の調理場」と心のなかでただちにイワンは綽名をつけた。）

以上2つの例文からわかることは、動作主項が共起するアオリスト受動文で観察された視点中心軸の一貫性、主題の一貫性というものは、動作主項が共起しない場合にはアオリスト受動文だけでなくOV語順の不定人称文でも表現されうるということである。不定人称文において直接目的語を動詞の前に置くことは、ある程度受動文の主語に似た役割を果たしているのである。以上のことから、動作主項が共起しないアオリスト受動文と不定人称文の機能的差異は、動作主項をもつアオリスト受動文で観察された使用動機とは異なる説明がなされなければならない。

5.4.2.2 結束性

視点位置の一貫性が動作主項をもたないアオリスト受動文形成のファクターになり得な

いとするならば、他にどのような機能が働いているのであろうか。

以下の(46)、(47)の下線部(____部分)は、いずれもアオリスト受動文である。どちらの場合も、後続文(_____部分)において主語が省略された文になっており、文の結束性の維持のために受動文が選択されている。

(46) Иван только горько усмехался про себя и размышлял о том, как все это глупо и странно получилось. Подумать только! Хотел предупредить всех об опасности, грозящей от неизвестного консультанта, собирался его изловить, а добился только того, что попал в какой-то таинственный кабинет затем, чтобы рассказывать всякую чушь про дядю Федора, пившего в Вологде запоем. Нестерпимо глупо!

Наконец Ивана отпустили. Он был препровожден обратно в свою комнату, где получил чашку кофе, два яйца в смятку и белый хлеб с маслом.

Съев и выпив все предложенное, Иван решил дожидаться кого-то главного в этом учреждении и уж у этого главного добиться и внимания к себе, и справедливости. «Мастер и Маргарита»

(Иванは心のなかでひそかに苦笑し、なにもかもが愚かで奇妙なことになったのはどうしてなのか、と思いをめぐらしていただけた。まったく、あきれたものだ。見知らぬ特別顧問が惹き起こそうとしている危険をみんなに警告し、彼を捕まえようとした結果は、どことなく謎めいた部屋に収容され、飲んだくれて死んだヴォログダ市の伯父フョードルについて、あれやこれやとくだらぬことを話す破目に陥っただけだ。まったくもって、ばかげている。

やっとИванは解放された。彼は自分の部屋へ連れ戻され、そこでコーヒーを一杯、半熟卵を二個、バターを塗った白パンをもらった。

出されたものをすべてたிரらげてコーヒーを飲み終わると、Иванはこの病院の責任者を待ち受け、自分への注意と公正を期待しようと決心した。)

(47) ... Потом он [Валентин Сергеевич] сказал: "Попросить нас вы ни о чем не желаете?" Данилову, по выражению глаз Валентина Сергеевича, показалось, что

ради этого вопроса его и призвали. "Нет, - сказал Данилов. - Мне не о чем просить..." "Ну что ж, - кивнул Валентин Сергеевич. - Ваше дело. Отбывайте".
Данилов был отпущен, ушел, так и оставшись в неведении, кто над ним главный - Валентин Сергеевич или Малибан. «Альтист Данилов»

(それから彼(ヴァレンチーン・セルゲーヴィチ)は「何か我々に頼みたいことはありませんか?」と言った。ダニーロフは、ヴァレンチーン・セルゲーヴィチの眼が、『あなたは、まさにこの質問のために呼び出されたのですよ』と言っているように思われた。「いいえ。何もお願いすべきことはありません……」とダニーロフは言った。「まあ、いいでしょう。あなたの問題ですから。出立なさい」とヴァレンチーン・セルゲーヴィチはうなづいた。ダニーロフは、帰って宜しいと言われ、そこを去った。結局、誰が彼の主管なのか——ヴァレンチーン・セルゲーヴィチなのか、マリバンなのか——分からぬままに…….)

(46), (47)における受動文主語で表されている登場人物(___部分)は、それぞれ物語中での主人公や中心人物である。(46)では、「Он彼=Иванイワン(___部分)」が物語を構成する中心的な人物としての役割を担い、話の展開の軸として一貫してイワン寄りの視点から事態が描写されている。その中で、受動文によって彼の身に起こった事態が彼の視点から表現されている。当然のことながら、スポットライトを浴びる登場人物は1人とは限らない。2人の登場人物が対等に物語展開の軸になりうる場合もある。(47)では、2人の登場人物「Валентин Сергеевичヴァレンチーン・セルゲーヴィチ(___部分)」と「Даниловダニーロフ(___部分)」の会話のやりとりが展開される。その中で、受動文によってダニーロフの視点から彼に起こった事態が描かれる²²。ただし(46), (47)のいずれの場合も、受動文選択の動機になっているのは、視点位置の一貫性ではなく文の結束性の維持である。(46)における受動形「был препровожден連れ戻され(___部分)」を不定人称文で表現するために他動詞過去複数形「препроводили」に変更すると、「Он был препровожден」→「Его препроводили」となり、後続節の「он彼」が省略されている「где получилそこで…もらった(___部分)」との結束性が崩れ、「Он был препровожден..., где получил...」→「Его препроводили..., где он получил...」となり、文の冗長性は避けられ

22 メイナード(1997)では、日本語の「ハ」にも同様の機能があることが指摘されており、「ハの主題化によるステージング効果」と呼んでいる。

ない。また(47)においても同様に、「ушелそこを去った(.....部分)」の主語は、受動文「был отпущен帰って宜しいと言われ(____部分)」の主語と同じ「Даниловダニーロフ(____部分)」であり、結束性維持のために受動文が選択されているのである。

5.4.2.3 主題化機能

結束性維持の他に受動文選択に影響を与えうる重要なファクターは、従来の受動文機能の一つとみなされてきた主題化機能である。以下の(48)、(49)は、その主題化機能の説明の根拠となる受動文(____部分)である。(48)は前文で新しく登場した人物(____部分)を、(49)は前文で話題になっている既出名詞句を受けて、それぞれ後続文で受動文主語として主題化し、それを出来事展開の一部として描写するものである。

(48) ... Случилось так, что в наш городок попал (не по своему желанию) один по-настоящему талантливый актер (назовем его А.). Он был принят в театр и получил роль в той пьесе, которую я режиссировал. Началась репетиция. И что же? Как только заговорил А., на сцену немедленно вышла собачка. «Кафедра»
(我々の小さい町に(自ら希望してではなく) 一人の本格的な才能のある俳優(Аという名にしておこう)がやって来ることになりました。彼は劇場に採用され、わたしが演出していた芝居の役も手に入れました。稽古が開始されました。これはいったいどうしたことか? Аが台詞を言い始めるやいなや、すぐに子犬が舞台に飛び出して来たのです。)

(49) -- Bravo! -- вскричал Фагот, -- приветствую первую посетительницу! Бегемот, кресло! Начнем с обуви, мадам.

Брюнетка села в кресло, и Фагот тотчас вывалил на ковер перед нею целую грудку туфель.

Брюнетка сняла свою правую туфлю, примерила сиреневую, потопала в ковер, осмотрела каблук.

-- А они не будут жать? -- задумчиво спросила она.

На это Фагот обиженно воскликнул:

-- Что вы, что вы! -- и кот от обиды мяукнул.

-- Я беру эту пару, мосье, -- сказала брюнетка с достоинством, надевая и вторую туфлю.

Старые туфли брюнетки были выброшены за занавеску, и туда же проследовала и сама она в сопровождении рыжей девицы и Фагота, несшего на плечиках несколько модельных платьев. Кот суетился, помогал и для пущей важности повесил себе на шею сантиметр. «Мастер и Маргарита»

(「ブラヴォー！」とファゴットが叫んだ。「ようこそ、最初のお客さま！ ベゲモート、椅子を！ 靴からはじめましょう、マダム！」)

ブリュネットの女が肘掛椅子に腰をおろすと、ファゴットはすぐさま足もとの絨毯の上に靴を山のように積み上げた。

ブリュネットの女は履いていた右の靴を脱ぎ、藤色の靴に足を突っこんで寸法を合わせると、絨毯の上で足を踏みしめて踵のあたりをじっと眺めた。

「きつくないかしら？」と物思わしげに彼女はたずねた。

これには感情を害されたみたいに、ファゴットは声を張りあげた。

「何をおっしゃいます、とんでもない！」猫は猫で、侮辱されたように鳴いてみせた。

「これをいただきますわ、ムッシュー」ブリュネットの女は左足に靴を履きながら、もったいぶって言った。

ブリュネットの女の履き古した靴はカーテンの向うに投げ捨てられ、それを追うみたい、何着かの流行のドレスを肩にかけたファゴットと赤毛の女にともなわれて彼女もカーテンのうしろに歩み去った。猫はかいかいしく世話を焼き、いっそもったいをつけるために巻尺を首からぶらさげたりした。)

(48)における受動文の前文の文末主語「один по-настоящему талантливый актер 一人の本格的な才能のある俳優が(____部分)」はこの文で新しく登場した人物を表しており、文章内で最も際立ちが与えられている。そして、それは後続する受動文で主語化操作を行うことで、主題としての地位を獲得していることがわかる。と同時に、受動文に後続する文(____部分)との結束性維持による受動文形成動機も見逃せない。(49)はブリュネットという人物が靴の品定めをし、お気に入りの靴が見つかったため、自分の履いていた靴

を捨てる場面である。前文の既出名詞句である「靴（ 部分）」を受けて、後続する受動文で主題としての地位を得て、出来事展開の一部として説明を加えるという手法がとられている。

5.4.2.4 その他の機能

アオリスト受動文は、上記の（46）－（49）のように、主語が文頭位置に置かれるのが本来の無標の語順である。一方、以下の（50）、（51）はいずれも受動文（ 部分）の主語（ 部分）が文末位置に置かれ、有標化された受動文である。

（50）... После каждой работы лаборатория превращалась, по словам Петра Гавриловича, в Мамаево побоище. Весь персонал во главе с самим завлабом, вооружась отвертками, тестерами, запасными деталями, проверял, ремонтировал, отлаживал аппаратуру. Вскоре к этим работам была привлечена и Майка Дудорова -- легкие пальцы, тонкое внимание, сообразительность. Зачастую она находила неисправность быстрее инженеров. Петр Гаврилович своей лаборанткой не мог нахвалиться: "Золото, а не девка! Одна беда -- хорошенькая. Уведут".

Когда Майя пришла в лабораторию, ей было за двадцать, но казалась моложе: что-то школьное, с большой перемены. Родилась она тут, в Москве, от матери-одиночки и неизвестного отца; мать о нем никогда не говорила и спрашивать не позволяла: "Молчи, Маенька, моя ты, и ладно". В то время у "незаконных" еще ставились прочерки в метриках; Майка от своего самолюбиво страдала. «Кафедра»

（毎回作業が終わると、ピョートル・ガブリーロヴィチの言葉によると、実験室は激戦地ママエヴォの丘の様相を呈した。実験室主任を頭にして全スタッフがドライバー、テスター、予備部品で武装し、機器を検査し、修理し、調整した。間もなくこの仕事に マイカ・ドゥドロワも引き込まれた——軽快な指先、細心の注意、想像力があるためだ。しょっちゅう彼女は故障を技師たちよりも早く発見した。ピョートル・ガブリーロヴィチは自分のところの実験助手をいくらほめてもほめたりな

かった、《宝もんだ、ただの娘っ子じゃない！ 一つ困ったことは——器量よしなんだ。さらわれっちまうよ》

マイヤが実験室にやってきたときは二十歳を過ぎていたが、若く見え、何か学生が休み時間にやってきたような感じであった。彼女はここモスクワで独身女性と自分の知らない父との間に生まれた。母は父親のことを話したことがなかったし、質問することも許さなかった。《何も言わないで、マーエンカ、あんたはわたしのもの、それでいいのよ》 その頃、《私生児》は戸籍でまだ横線が引かれていた。マイカはそのため自尊心を傷つけられて苦しんだ。）

(51) Все разом захохотали, заплодировали, одобряя достойную отповедь тому ничтожному националисту, все разом встали с вытянутыми наготове бокалами в руках. "За Сталина", - выдохнули все разом, и все выпили, демонстрируя друг другу опустевшие бокалы, как бы подтверждая тем самым истинность сказанных слов и свою верность им.

Затем было сказано еще многое в продолжение этой мысли. И слова эти, самовоспроизводясь и умножаясь, долго еще кружились над головами собравшихся, накапливая в себе скрытый гнев и ярость, как рой распаленных диких ос, все более озлобляющихся оттого, что они ядоносны и их много.

«Белое облако Чингисхана»

(一座の者が一斉に笑いだし、拍手をして、前代未聞の厚かましさを口にしたそのくだらぬ民主主義者に対する見事なしっぺ返しを称賛し、すぐさま全員が立ち上がって、グラスを高く差し上げた。「同志スターリンのために！」——その言葉が一斉に口をついて出て、皆が飲み干し、空のグラスを互いに見せ合って、あたかもそのことによって自分らが口にした言葉の真実さとその言葉に対する忠誠心を裏づけようとしているかのようにであった。

それに続いて、その思想の延長線上にある さらに 多くのことが 語られた。それらの言葉は繰り返して再生産され、自己増殖しながら、いつまでも参会者たちの頭上を飛び回り、隠された怒りと狂暴さを蓄積しながら、興奮したスズメバチの群れのように、それ自体が毒をもち、しかも数が多いということのために、ますます激しいものになっていった。）

(50), (51) の受動文 (____部分) の文末位置の主語 (____部分) —— (50) では「Майка Дудорова マイカ・ドウドロワ」, (51) では「многое 多くのこと」 —— は, いずれもこの文章内で最も際立ちが与えられており, (50) では強意を表す и (____部分), (51) では追加を表す еще (____部分) の存在がそれを物語っている. (50) における下線部 (____部分) の登場人物マイカ・ドウドロワは, それ以前の部分ですでに導入されている中心人物の 1 人であり, 砂川 (2005: 119-120) で指摘される古い情報を再活性化させるために焦点化されているものである. さらに文頭にある「к этим работам この仕事に (____部分)」は, 前文とのつながりの役割をも果たしている. 一方 (51) の受動文主語「многое 多くのこと (____部分)」は, この文で新しく導入された指示対象であり, 述語の後ろに置くことで際立ちが与えられている. そして (50), (51) いずれの場合も, その指示対象は後続文で主題としての地位を獲得しており, 主題交替の現象が起こっている. 特に, (50) におけるアオリスト受動文の主語がヒトの場合, その登場人物は後続文において再び話の展開の中心的な役割を担っていることがわかる.

5.4.3 不定人称文のアオリスト用法

5.4.3.1 人為的な外的作用

すでに 5.4.1 で述べたように, 不定人称文の 2 つの重要な特徴として, ①不定人称文の形態・統語的特徴, ②潜在的動作主の制限の有無が挙げられる. ①に関しては, 不定人称文は受動文で観察されるような形態的・統語的な操作が行われれないということから, 能動態であると結論づけた. ②については, 不定人称文の潜在的動作主は人間に限定されるが, 分詞形受動文にはそのような制限がないという先行研究の指摘から, 不定人称文には動作主のイメージがあるが, 分詞形受動文にはそのようなイメージがないと考えた. 不定人称文が能動態であり, 動作主のイメージがあること, それにより不定人称文の場合には, 「外からの人為的な働きかけが非常に強い」という意味が含意されているのではないかと考えられる.

以下の (52) - (54) の下線部 (____部分) は, いずれもアオリスト不定人称文である. (52) の「вызвали 呼び出された」, (53) の「вывели 連れ出されて」「поместили 収容された」, (54) の「вывели 連れ出され」「пустили 放される」「увезли 連れ去られた」は,

いずれも動作対象名詞句の強制的な位置移動を表す動詞であり，外からの人為的な働きかけが強い行為である。

(52) В милиции он [Данилов] подал заявление о пропаже альта, попросил инструмент отыскать. И страховое учреждение он поставил в известность о своей беде. Был он в бюро находок, осматривал и вещи, найденные в метрополитене, но инструмента нигде не обнаружилось.

В театре Данилова сразу же вызвали к телефону, и он услышал голос Муравлева. «Альтист Данилов»

(警察で彼(ダニーロフ)はヴィオラの紛失届けを出し，その楽器を捜してくれるように頼んだ。保険局にも彼は自分の災害を届けた。拾得物管理事務所に行って，地下鉄内での拾得物も見てみた。だがどこにも彼の楽器はなかった。

劇場に着くと間もなくダニーロフは電話口に呼び出された。すぐに声でムラヴリョーフ氏だと分かった。)

(53) Кровь отлила от лица Никанора Ивановича, он, дрожа, крестил воздух, метался к двери и обратно, запел какую-то молитву и, наконец, понес полную околесицу.

Стало совершенно ясно, что Никанор Иванович ни к каким разговорам не пригоден. Его вывели, поместили в отдельной комнате, где он несколько поутих и только молился и всхлипывал. «Мастер и Маргарита»

(顔から血の気が引いたニカノル・イヴァノヴィチは身をわなわなと震わせながら宙で十字を切り，ドアに突進しては戻ってき，なにかの祈祷の文句をとねえ，しまいには，まったくばかばかしい話をしゃべりはじめた。

もはやニカノル・イヴァノヴィチが いかなる事情聴取にも応じられなくなっているのは，火を見るよりも明らかとなった。彼は 連れ出されて特別室に収容されたが，そこでいくぶんおとなしくなり，祈ったり，すすり泣いたりするばかりだった。)

(54) Лишь только Тузбубен вбежал в кабинет финдиректора, он зарычал, оскалив чудовищные желтоватые клыки, затем лег на брюхо и с каким-то выражением тоски и в то же время ярости в глазах пополз к разбитому окну. Преодолев свой

страх, он вдруг вскочил на подоконник и, задрвав острую морду вверх, дико и злобно завыл. Он не хотел уходить с окна, рычал и вздрагивал, и порывался спрыгнуть вниз.

Пса вывели из кабинета и пустили его в вестибюль, оттуда он вышел через парадный вход на улицу и привел следовавших за ним к таксомоторной стоянке. Возле нее он след, по которому шел, потерял. После этого Тузабубен увезли.

«Мастер и Маргарита»

(〈ダイヤのエース〉は経理部長室に駆けこむなり、黄ばんだ大きな歯を剥きだして唸りはじめ、それから腹這いになると、なにかしら悲しみとともに怒りの色を目に浮かべ、ガラスの割れた窓のほうへ這って行った。恐怖に打ちかつと、突然、犬は窓敷居に跳びあがり、とがった鼻面を突き出すように持ち上げると、奇妙な、敵意のこもった声で吠えはじめた。犬は 窓から離れようとはせず、唸り、身を震わせては下に跳びおりようと身構えていた。

犬は執務室から連れ出され、玄関ホールに放されると、そこから正面玄関を抜けて通りに出、あとについてきた人々をタクシー乗場へと導いた。そのあたりで、犬は形跡を見失ってしまった。このあと、〈ダイヤのエース〉は 連れ去られた。)

(52) では、物語の中心的な役割を与えられた「Данилов Даниэроф (____部分)」の視点からダニエロフに起こった事態の展開が次々と描かれている。不定人称文の前後でダニエロフが一貫して主題になっており、不定人称文のところにおいても、直接目的語を動詞の前に配置することで主題が維持されている。(53), (54) においても同様の現象が観察される。そして (52) - (54) いずれの場合も、動作対象への外からの人為的な働きかけが非常に強い行為であり、不定人称文の動詞の表す意味に「否応なしに、無理矢理、一方的に」が含意されていることがわかる。特に (53) では「ни к каким разговорам не пригоден いかなる事情聴取にも応じられなくなっている (_____部分)」→「だから無理矢理連れ出されて収容された」、(54) では「не хотел уходить с окна, рычал, и вздрагивал, и порывался спрыгнуть вниз 窓から離れようとはせず、唸り、身を震わせては下に跳びおりようと身構えていた (_____部分)」→「だから無理矢理連れ出された」という解釈がいずれも可能であり、さらに (53) では、すでに 5.4.2.2 で見たように、後続の где 節 (_____部分) との結束性維持のために受動文「Он был выведен, помещен」が要請されるのにも関

ならず、あえて不定人称文が使用されており、このことは外からの人為的な働きかけが非常に強いことを表すために不定人称文が選択されるという示唆である。

5.4.3.2 アオリスト受動文との比較

以上の(52) - (54)で述べた「外からの人為的な働きかけが非常に強い」という不定人称文の特徴は、ヴォイス変換が行われるとそのような特徴が弱化されると言えるかもしれない。先に見た(44)と(46)をもう一度見てみよう。

- (44) Тем временем принципский бык Мигуэль самолетом прибыл в Мадрид. Уж на что он вчера стал неприятен местным жителям, а теперь, после ночных переплетов и нуакшотского сидения, его встречали как родного. С гитарами, с кастаньетами. Бык опять лежал, лишь иногда поднимал голову и смотрел на публику мутным глазом. Однако теперь в его позе и взгляде виделось нечто царственное. Вынесли его из самолета на специальных носилках человек двадцать - все атлеты. Данилов при этом опять пожалел бедняг террористов, в особенности японца или филиппинца. Тут же бык Мигуэль был снова водружен на орудийный лафет и в сопровождении мотоциклистов мадридскими пласами и авенидами благополучно отправлен в предназначенную ему резиденцию.

«Альгист Данилов»

(そうこうしているうちにプリンシペ島の雄牛ミゲルが飛行機でマドリードに到着した。昨日はマドリード市民の敵だったとはいえ、真夜中のとんだ災難とヌアクショットでの拘禁を経た今や、ミゲルは身内として迎えられた。ギターとカスタネットでお出迎えである。雄牛はまたしても横たわったままで、ただ時折首を持ち上げ、ぼんやりとした眼差しで人々を見た。しかし今や彼のポーズと眼差しにはどことなく勝ち誇っているようなところがあった。特別製の担架に載せられ、雄牛をおよそ二十人がかりで飛行機から運び出した。担ぎ手は皆、大男のスポーツマンである。ダニーロフはこれを見て再び、哀れなテロリストたちのことが、特に例の日本人だかフィリピン人だかが、気の毒になった。すぐさま雄牛ミゲルは再び砲架の上に高く掲げられ、オートバイを従えてマドリードの目抜通りや大通りを通って、彼

に与えられることになっている邸へと運ばれた。)

- (46) Иван только горько усмехался про себя и размышлял о том, как все это глупо и странно получилось. Подумать только! Хотел предупредить всех об опасности, грозящей от неизвестного консультанта, собирался его изловить, а добился только того, что попал в какой-то таинственный кабинет затем, чтобы рассказывать всякую чушь про дядю Федора, пившего в Вологде запоем. Нестерпимо глупо!

Наконец Ивана отпустили. Он был препровожден обратно в свою комнату, где получил чашку кофе, два яйца в смятку и белый хлеб с маслом.

Съев и выпив все предложенное, Иван решил дожидаться кого-то главного в этом учреждении и уж у этого главного добиться и внимания к себе, и справедливости. «Мастер и Маргарита»

(Иванは心のなかでひそかに苦笑し、なにもかもが愚かで奇妙なことになったのはどうしてなのか、と思いをめぐらしていただけだった。まったく、あきれたものだ。見知らぬ特別顧問が惹き起こそうとしている危険をみんなに警告し、彼を捕まえようとした結果は、どことなく謎めいた部屋に収容され、飲んだくれて死んだヴォログダ市の伯父フョードルについて、あれやこれやとくだらぬことを話す破目に陥っただけだ。まったくもって、ばかげている。

やっとИванは 解放された。彼は 自分の部屋へ 連れ戻され、そこで コーヒーを一杯、半熟卵を二個、バターを塗った白パンをもらった。

出されたものをすべてたிரらげてコーヒーを飲み終わると、Иванはこの病院の責任者を待ち受け、自分への注意と公正を期待しようと決心した。)

(44), (46) とともに、受動文主語は前後の文章で中心的な登場人物・動物として話の展開の軸となっており、その中で受動文が選択され、さらに (46) では後続のгде節との関係で不定人称文の選択はあり得ないということは 5.4.2.1, 5.4.2.2 で見たとおりである。ところが (46) の受動文の前の不定人称文「отпустили解放された (___ 部分)」に注目すると、本来であるならば「Иван」は話の展開の軸となっているので、この不定人称文は受動化されなければならない。しかしながら、ここでは不定人称文が選択されている。当

然Наконец（やっと）という副詞の存在が出来事が大きく転換することを表し、そのことが不定人称文の選択を決定づける要因になるが²³，ここで重要なことは「解放する」という行為が外からの人為的な働きかけが非常に強いものであるということである。一方，後続文の受動形の「Он был препровожден彼は自分の部屋へ連れ戻され（___部分）」にはそういった意味が含まれない。確かに「連れ戻す」という行為には外からの人為的な働きかけを伴うが，ここでは解放されて自分の部屋に戻れるわけであるのでイワンにとって強制を伴うような行為にはならない。従って，アオリスト受動文には人為的な外的作用の弱化的意味が含意されているのではないかと考えられる。（46）においても同様に，「встречали как родногоミゲルは身内として迎えられた（_____部分）」「Однако теперь в его позе и взгляде виделось нечто царственноеしかし今や彼のポーズと眼差しにはどことなく勝ち誇っているようなところがあった（_____部分）」「в предназначенную ему резиденцию彼に与えられることになっている邸へと（_____部分）」といったコンテキストから，受動文が外からの人為的な働きかけを弱めるために使用されているということがわかる。

- 23 例文（46）の不定人称文は，先の5.4.2.1の例文（45）や5.4.3.1の例文（52）と同様に，いずれも段落の最初の文で時・場所の副詞句の後に目的語が動詞に先行しており，これらに何らかの共通する特徴が存在するかのようと思われる。林田（2013）でも指摘されているが，不定人称文では時・場所を限定する状況語が文頭に置かれ，潜在的動作主の想定範囲を限定することが多い（林田 2013: 82）。しかしながら，実際には5.4.3.1の例文（53）の1段落隔てた後続文には，以下のように段落の最初の文で時の状況語が文頭に置かれたアオリスト受動文の使用例が観察される。従って，文頭位置における副詞の共起は不定人称文とアオリスト受動文の構文選択に影響を与えるものではないと考えられる。おそらくこの構文選択には，5.4.2.1の（42）が関わっていると思われる。

Вечером Никанор Иванович был доставлен в клинику Стравинского. Там он повел себя настолько беспокойно, что ему пришлось сделать впрыскивание по рецепту Стравинского, и лишь после полуночи Никанор Иванович уснул в 119-й комнате, изредка издавая тяжелое страдальческое мычание. Но чем далее, тем легче становился его сон. Он перестал ворочаться и стонать, задышал легко и ровно, и его оставили одного. «Мастер и Маргарита»（夕方にニカノル・イヴァノヴィチはストラヴィンスキー教授の病院に送りこまれた。そこでも彼はひどく暴れまわったので教授の処方による注射を打たれる破目になったが，真夜中になってようやく，いかにもつらそうな苦痛にみちた呻きをときおり発しながらも，ニカノル・イヴァノヴィチは一一九号室で眠りに落ちた。しかしそのうちに眠りはしだいに安らかなものになっていった。彼は寝返りを打ったり，呻いたりするのをやめ，呼吸も楽になり規則正しくなったので，彼一人を残して医師たちは引きあげた。）

5.4.3.3 その他の機能

不定人称文には、5.4.3.1 の (52) - (54) のように、OV 語順タイプの主題化機能をもつもの以外に、VO 語順のタイプも観察される。以下の (55), (56) の下線部 (____部分) は、いずれも VO 語順タイプの不定人称文である。

- (55) Потом объяснили: бензин был государственный, шкипер не имел права его продавать, а председатель не имел права покупать. Кто понял, а кто нет. На собрании, как делегацию, выбрали трех человек, которые должны были хлопотать за председателя. Они сделали все, что могли: много раз ездили в район, один раз даже в область, писали бумаги в Москву, но ничего не добились, а может, еще и повредили председателю, потому что ему дали пятнадцать лет. Тут уж было над чем ахнуть. «Деньги для Марии»

(後になって説明されたところによると、ガソリンは国家のものなので、船長には売る権利はないし、議長には買う権利が無かったというのだ。納得した者もいたし、しない者もいた。集会では、代表団として議長のために斡旋の労を取る三人が選ばれた。彼らは出来る限りのことをした。何度も地区センターへ行き、一度は州センターへまで出かけたし、モスクワへも書類を送ったが何の功もなかった。それどころか、ことによるとかえって逆効果になっていたのかもしれない。なぜなら議長は、十五年の刑を喰らったのである。これにはみんな、あっと声をあげた。)

- (56) Летом поехали добровольцами на стройку в Сибирь. Выдали им красивые защитные комбинезоны с сине-белой надписью поперек спины (название стройки). Люда ждала многого от этой поездки, но была разочарована. Тайга ей не понравилась, по книгам она ее себе другой представляла -- ... «Кафедра»

(夏には志願してシベリアの建設現場へ行った。彼女らに背中に青白色の文字(建設現場の名前)の入った防護服が配給された。リューダはこの旅行に大いに期するところがあったのだが、失望した。タイガーはリューダには気に入らなかった。彼女は読んだ本で別な風に考えていた。)

(55) の不定人称文の動詞の後ろに位置する直接補語「трех человек 三人 (部分)」は、この文で新しく導入された登場人物を表している。そして、その指示対象は後続文で主題としての地位を獲得している。しかしながら、上記の 5.4.2.4 の (50) で見たアオリスト受動文とは異なり、(55) の新人物は後続文で主題としての地位を獲得してはいるが、それは一時的なものであり、アオリスト受動文の主語として現れる登場人物のように、後続文において話の展開の中心的な役割を担ってはいないのである。一方、(56) の直接補語「красивые защитные комбинезоны 防護服 (部分)」は事物名詞であり、当然その指示対象は新情報であるのだが、(55) とは異なって主題交替現象は起こらない。これは、すでに 5.4.2.4 の (51) でみたアオリスト受動文の文末主語の焦点化によって後続文で主題交替現象が起こるのとは対照的である。

5.4.4 まとめ

本稿では、先行研究で明らかにされてこなかったアオリスト受動文と不定人称文の機能的差異について考察を行った。2 つの構文の決定的な差異は、不定人称文が「外からの人為的な働きかけが非常に強い」という意味が前面に出て「否応なしに、無理矢理、一方的に」が含意されるのに対して、アオリスト受動文の方はこのような意味を弱める働きをもつということである。そして、アオリスト受動文にはテキストレベルでの結束性の維持や有標語順における主題交替現象が観察されるのに対して、不定人称文ではそのような現象は見られず、唯一 VO 語順タイプで直接目的語がヒト名詞の場合に限り、一時的な主題交替現象が起こるのみである。

第6章 現代ロシア語の再帰形受動文の諸機能

この章では現代ロシア語のもう一つの受身文である不完了体他動詞派生の再帰動詞を使用した再帰形受動文について具体的に考察していく。

6.1 再帰形受動文のデータ収集, 方法

再帰形受動文に使用される再帰動詞は、一般再帰（主体内にとどまり、他へ波及しない自律的動作・変化）、純粹再帰（自身への動作）、相互再帰（複数主体間にとどまる動作）など様々な意味的機能が混在している。そのため、受身用法と判定する際、分詞形受動文のように形態による明確な基準はない。構文内に造格形による動作主項が表示されている場合には、問題なく受身用法として分類できるが、松川（1971）によれば、再帰構文における受身用法の判定が困難になるのは、次の(57)–(59)の場合であるとしている（松川 1971: 8–9）。

(57) Трубочист поднимается через трубу.

（煙突掃除人は煙突をのぼっている。）

(58) Сажа поднимается через трубу.

（煤が煙突から上がっている／噴き上げられている。）

(59) Дым поднимается через трубу.

（煙が煙突から上がっている／噴き上げられている。）

(57) では трубочист（煙突掃除人）はヒトであり、подниматься（のぼる）という行為の動作主である。よって(57)が受身用法ではないことは明らかである。次に(58)、(59)であるが、受身用法の判定に揺れが生じるのは、このような事物主語をとるタイプの再帰形受動文である。80年のアカデミー文法（Русская грамматика 1980）においても、このタイプの再帰形受動文においては受身の意味は弱化され、再帰動詞は受動でも能動でもどちらでも解釈し得ると述べられている（Русская грамматика 1980: 617）。そして実はこの揺れこそが再帰形受動文の理解を難しくしているのである。松川（1971）では、「煤には

のぼる性質はないのに、煙にはそれがある」と考え、(58)を受動態、(59)を再帰構文として捉えている(松川 1971:9)。林田(2013)においては、受身用法の必要条件として主語の脱動作主性(主語以外の潜在的動作主の存在)を挙げ、主語名詞句が示す人・事物の動作・変化・状態に、主語以外のいかなる外圧も直接的には関与していない場合、再帰形受動文は中動用法を表すとしている(林田 2013:80)。さらに続けて、「花火を上げる」→「花火が上がる」、「茶碗を割る」→「茶碗が割れる」の例を挙げて、「本来、自律的な運動が考えられないような事物であっても、あたかも自ら変化、運動するかのようなメタファー表現が成立し、その場合には存在するはずの外在的な動作主は話者のイメージからはずれ、事物そのものの変化が自律的に生起する事態として描かれる」と述べている(林田 2013:80-81)。先の松川で受動態とされた(58)は、林田の考え方に従えば、非受動と判定されることになる。

さらに以下の(60)における *закрываться* は、言語外事実としては外在的な動作主が想定される動作であり、語彙としては受動/非受動どちらの読みも可能な動詞である。

(60) В коридоре слышались шаги командора. Оказалось -- не командора, а коменданта.

-- Граждане, прошу очистить помещение, -- сказал он гранитным басом. --

Здание закрывается.

«Кафедра»

(廊下にコマンドールの足音が聞こえてきた。コマンドールと思いきや、校舎管理人だった。「みなさん、お引き取りください。閉館です」と彼はがんこそうなバスで言った。)

このタイプの再帰構文は、先行研究では一律に再帰形受動文の現実的持続相として理解されてきたものであるが(Пупынин 1991: 214; Храковский 1991: 162)、林田(2013)では明確な非受動の意味として判定されている。理由として、「閉めます」や「閉められます」ではなく、敢えて「閉まります」「閉館です」と表現することで、事態は人の動作が介在できない、変更できない規定事項であると知らしめる効果をもたらすということが挙げられている(林田 2013:81)。Пупынин(1991)、Храковский(1991)においてはこの動詞の受動判定の理由については述べられていないが、おそらく外在的な動作主が想定されるか

どうかを受動判定の基準にしていると思われる。筆者は林田の理解を支持するが、その理由として、後述するように、再帰形受動文はそもそも受動態の体をなしていないと考えるからである。

以上、再帰構文における受身用法の判定の難しさをみてきたわけであるが、データ収集に際しては、上記の事実を考慮に入れながら収集、分析した。得られたデータは、中・長編小説7作品²⁴で、総ワード数 341,650、再帰形受動文 238 例、動作主項 19 例である²⁵。本論では、林田（2013）において分析されていない再帰形受動文の動作主項について考察する。

6.2 再帰形受動文の動作主項

6.2.1 動作主項データ

すでに 5.2.1 でみたように、先行研究ではロシア語における受動文の造格形動作主表示の頻度は少ないということが再三指摘されてきたが、分詞形受動文だけでなく、再帰形受動文においても動作主項表示の頻度は少ないといっていだらう。再帰形受動文 238 例中、動作主項をもつものはわずか 19 例、約 8% であり、分詞形受動文よりもさらに少なくなる。

以下の表 11 は、上記の全 19 例の動作主項をもつ分詞形受動文を、主語と動作主項に注目して、それぞれヒト名詞と事物名詞に分類したものである。

表 11 再帰形受動文の主語と動作主項

	総数	動作主項	
		ヒト	事物
主語名詞句がヒト	0	0	0
主語名詞句が事物	19	7	12
計	19	7	12

24 分析対象とした作品は、Ч. Айтматов. «Джамиля», «Белое облако», М. Булгаков. «Белая гвардия», И. Грекова. «Кафедра», А. Маринина. «Убийца Поневолле», Б. Окуджава. «Похождения Шипова», В. Распутин. «Деньги для Марии»の7作品である。

25 林田（2013）におけるデータは著者ととも共同作業で収集したものである。林田先生よりデータの使用許可をいただいている。

表 11 からまず、受動文主語がすべて事物名詞であることが読み取れる。これは、先行研究で再三指摘されてきた「再帰形受動文における主語は事物名詞が典型的である」という事実を反映したものである。次にヒト名詞を動作主項にもつ再帰形受動文の頻度数をみると全 19 例中 7 例（37%）に対し、事物名詞を動作主項にもつ分詞形受動文は全 19 例中 12 例（63%）であり、後者の方が頻度として高くなっており、分詞形受動文の場合とほぼ同じ結果となっている。

このように、分詞形受動文と同じく、なぜ事物名詞が高い頻度で再帰形受動文の動作主項として現われるのであろうか。おそらく再帰形受動文の場合も本来の意味である意志性をもつ動作主として表現されていないのであろう。また再帰形受動文の動作主項の少なさから、この構文が結局のところ受動態として機能していない可能性も示唆される。

6.2.2 受動文主語—事物，動作主項—事物

まず、再帰形受動文の主語、動作主項のいずれも事物名詞である場合には、明らかな傾向として、動作主項で指示される事物名詞は本来の意味での動作主として機能していないということが読み取れる。

(61) Настя Каменская и Владимир Вакар сидели на скамеечке в тихом московском дворике. Было совсем темно, дворик освещался только слабым светом из окон. Моросил мелкий противный дождик, Настя накинула капюшон, а Вакар так и сидел с непокрытой головой.

«Убийца поневоле»

(アナスタシヤ・カメンスカヤとウラジーミル・ワカールは典型的なモスクワのアパートの静かな中庭のベンチに腰を下ろしていた。外はもう真っ暗で、中庭をかすかに照らすのは、窓の明かりだけだった。まとわりつくような嫌な小糠雨が降っていた。アナスタシヤはジャンパーのフードをかぶっていたが、ワカールは塗れるに任せたままだった。)

(62) -- Правильность языка, его здоровье, -- говорил тем временем Энэн, -- создается коллективными усилиями людей, которым не все равно. Страсти,

бушующие вокруг языка, -- здоровые страсти. Губит язык безразличие. ...

«Кафедра»

(「言葉の正しい使用, 健全な言葉は」——その間エネンが話している——「どうでもよくはない人々の集団的な努力によって創造されるものです. 言葉の周りにうずまく情熱というものは, 健全な情熱です. 言葉をだめにするのは無関心な態度ですよ. ……)

(61), (62) は, 再帰形受動文で観察される典型的な例である. (61) は「中庭が窓からもれる明かりで照らし出されていた」という中庭の一般的な状態が描かれている. 他方 (62) は言葉というものの属性が語られている. いずれの場合も, 動作主項は本来的な動作主の意味として機能しているのではなく, その状態成立や属性表示にとって不可欠な構成物として表現されていることがわかる.

6.2.3 受動文主語—事物, 動作主項—ヒト

さて以下の (63) – (65) は再帰形受動文の主語が事物名詞で動作主項がヒト名詞の場合の例文である.

(63) Дом Графа Толстого охраняется в ночное время значительным караулом, а из кабинета и канцелярии устроены потайные двери и лестницы.

«Похождения Шипова»

(トルストイ伯爵邸は夜間かなり厳重な警備に守られており, また書齋および事務室からは秘密の扉と階段が設けられている.)

(64) Надо отдать Флягину справедливость: он не только с других требовал, но и с себя. Долгими часами он сидел за своим столом с книгой и конспектом, развернутыми рядом, низко наклонясь, как бы выклеывая со страниц знания, -- читал и строчил, читал и строчил. Видимо, большими способностями он не обладал, но трудолюбие его было неслыханно ("роботоспособность", как сказал Лева Маркин). Любая книга, за которую брался наш шеф, изучалась им всегда

досконально, все доказательства проверялись до буковки и воспроизводились в конспекте. Читал он очень медленно, ...

«Кафедра»

(フリーギンに対しても公正を期す必要がある。彼は他人だけでなく、自分に対しても厳しかった。長時間にわたって彼は、書物と講義要領とを並べた机に向かい、各ページから知識をついばむように、低く屈み込んで、読んでは書き取り、読んでは書き取っていた。どうやら、彼は大きな能力は持ち合わせなかったが、その勤勉さは前代未聞であった（レヴァ・マールキンによると《ロボットの能力である》）。我々のボスが取り組んだどんな書物も、常に詳細に研究され、すべての証明が一字句まで検討され、そして講義要領に再生された。彼は読むのは非常に遅かった。… …)

(65) Ввиду совершающихся фактов, а именно, когда ведется открытая война противу правительства не только демагогами и социалистами, но и людьми, заявляющими свое либеральное направление, должно по мере возможностей считать полученное известие заслуживающим всяческого внимания.

«Похождения Шипова»

(現在進行中の事実に鑑み、すなわち、煽動者や社会主義者のみならず、自由主義的傾向を標榜している人々までが公然と政府に闘いを挑んでいる時である故、入手情報はできるだけ、細心の注意を要するものとして扱わねばなりません。)

(63) (64) ではそれぞれ「トルストイ伯爵邸」, 「書物」の恒常的な状態が描かれており、(64) では всегда (.....部分) があることからそのことがわかる。一方 (65) は現実的持続相の例で、これまで「動作主項が表示される場合には現実的持続相の意味は出ない」(Шелякин 1989: 203) と言われていたが、その主張を打ち消す結果となっている。この例文はいわゆる報告文の中で使用されており、文体としては非常にかたいといえる。

このようにみてくると、再帰形受動文が本当の意味での受身用法をもつのは、238 例中わずか 7 例だけである。これは全体のわずか約 2.9% である。この事実は、再帰形受動文が未だに受動態の機能をほとんど持ち得ていないという証拠であろう。確かにロシア語の再帰形受動文は、フランス語の代名動詞の受動用法とは異なり、動作主項表示は可能であ

るので受動態だという理解は成立する。しかしながら、上記の事実、すなわち「動作主項で表されるものは本来の意味での動作主ではない」ということは、この構文が受動態ではないという証明になるだろう。

6.3 再帰形受動文のAspect意味・機能

本節では、再帰形受動文において観察されるAspect意味・機能を見ていくわけであるが、このことに関してはすでに林田（2013）で詳細に分析されているので、本論ではその林田（2013）の分析結果を基に、再帰形受動文が現代ロシア語においても受動態カテゴリーをほとんど形成していないということを主張したいと思う。

6.3.1 習慣的事実，恒常的状态，属性表示

再帰形受動文における基本的なAspect意味は、習慣的事実，恒常的状态，属性表示であるとされる（Храковский 1991: 163; Шелякин 1989: 203）。以下の（66）（67）は林田（2013: 86-87）で挙げられている例文である。

（66）... Мы обгоняли Данияра, оставляя его в густых облаках долго не оседающей пыли. Хотя это делалось в шутку, но не каждый бы стал такое терпеть.

«Джамиля»

（ぼくたちはダニヤールを追いぬき、彼をいつまでもおさまらない、もうもうとした土煙の中に残していく。これはふざけ半分で行われたことだけれど、だれもが我慢できるものではなかっただろう。）

（67）... Когда сила силу ломит, удивительное становится ничтожным, а прекрасное жалким. Отсюда устоялся вывод: все, что попирается, то ничтожно, а все, что простирается ниц, заслуживает снисхождения в меру прихоти снисходящего. И на том мир стоит «Белое облако»

（力と力がぶつかりあうときは異常なものが日常となり、美しきものがみすばらしくなります。そこから生まれる結論は、踏みにじられるものはすべて取るに足り

ないものであり、足下にひれ伏すものは慈悲に値する、ただしその慈悲の程度はそれを垂れる者の気まぐれによる、それが人の世というものである、ということです。)

(66) は主語名詞句を性格づけた文、(67) は属性を表現した文であるが、いずれの場合も主語名詞句の性格や性質を特徴づけた文であり、そこに動作主による動作性というものは一切話者や語り手の視野に入ってきていない。先に見た(63)、(64)も主語名詞句の一般的な状態を表した文であり、上記と同じ事情によるものである。

また、反復・習慣相の変種とされる再帰形受動文で観察される長期継続相についても、林田(2013: 88)では意志性の排除を受動文形成動機の理由に挙げている。

(68) ... Иван спал вальяжно, в моей пижаме (после больших огорчений ему это позволяется). Богатырская грудь вздымалась.

«Кафедра»

(イワンはきちんとして眠っていた。私のパジャマを着て(さんざん嘆き悲しんで、イワンはそれを着ることを(仕方なく) 許してもらっている)。大きな胸が盛り上がっていた。)

以上をまとめると、習慣的事実、恒常的状态、属性表示、それらの変種とされる長期継続相は、意志性の有無が受動文形成動機に関わっているということである。

6.3.2 現実的持続

そして、この意志性の有無というものは現実的持続相の場合にも受動文形成動機に関わっている。

(69) -- Есть у вас еще вопросы? -- спросил председатель.

-- Есть. Я хочу спросить у диссертанта, как из формулы пятнадцать на плакате четвертом выводится формула девятнадцать на плакате пятом?

Яковкин подошел к плакатам осторожно, как к зияющей полынье. Нашел указкой формулы, спросил:

-- Эта? Эта?

Я подтвердила.

-- Как выводятся? Элементарно. С помощью тождественных преобразований.

«Кафедра»

(「まだ質問がありますか?」議長が尋ねた。

「あります。論文執筆者におたずねしたいのですが、どのように 4 番目のパネルの公式 15 から、5 番目のパネルの公式 19 が導き出されるのでしょうか?」

ヤーコフキンは、薄氷を踏むかのようにこわごととパネルに近付いた。

「これですか? これでしょうか?」

私はどれかを言った。

「どのように導き出されるか、ですか? もっとも簡単なことです。同様の変換を援用したわけです」)

(69) において、林田 (2013: 88-89) によれば、意志性を排除することで、「公式が導き出されるにあたって、研究者の意図は関与していない」ということを受動文によって表しているとしている。

6.3.3 モダリティー表現

必要／不必要，可能／不可能，規範等のモダリティーを表現するいわゆる中間構文は、ロシア語においては、擬似受動用法として受動構文とは区別される。

(70) - Деньги тоже уважать надо. Они даром не достаются. Ты за них работаешь, силу свою отдаешь, здоровье.

«Деньги для Марии»

(「お金も大切にしくちやいけないよ。何もしないで手に入るものじゃないんだから。あんただって、身体を張ってお金のために働いているんだろう?」)

6.3.4 まとめ

以上のことをまとめると、再帰形受動文の使用動機には、まず意志性の排除ということが大きく関わってくる。意志性を排除するということは、とりもなおさず動作主による動作性のイメージをなくすことにつながり、そのことがまさに 6.1 でみた受身用法の判定の揺れにつながっていくのである。また再帰形受動文の多くがモダリティー表現として使用されるという事実は、もうそこにはすでに動作主は一切関与していないといえる。したがって、再帰形受動文は受動カテゴリーを未だ形成していないと結論付けることができるだろう。そして動作主項がほとんど表示されず、されたとしても本来的な意味での動作主ではないという事実もまた、再帰形受動文が現代ロシア語においても受動表現として機能していないという裏付けとなるだろう。

参考文献

- Бондарко, Буланин 1967 — *Бондарко, А. В. и Буланин, Л. Л.* Русский глагол. Л. 1967.
- Бондарко 1978 — *Бондарко, А. В.* Теория значения и трактовка категории залога // Проблемы теории грамматического залога. Л. 1978.
- Бондарко 1991 — *Бондарко, А. В.* К определению понятия залоговость // Теория функциональной грамматики: Персональность. Залоговость. СПб: Наука, 1991. С. 125—140.
- Данков 1981 — *Данков, В. Н.* 1981. Историческая грамматика русского языка: Выражение залоговых отношений у глагола. М.
- Исаченко 1960 — *Исаченко, А. В.* Грамматический строй русского языка в сопоставлении со словацким. Морфология. Ч. II. Братислава: Изд-во Словацкой Академии Наук, 1960. с. 345—406.
- Крысько 1997 — *Крысько, В. Б.* Исторический синтаксис русского языка: Объект и переходность. М. 1997.
- Кузьмина, Немченко 1982 — *Кузьмина, И. Б., Немченко, Е. В.* История причастий // Историческая грамматика русского языка: Морфология. Глагол. М. 1982.
- Князев 1983 — *Князев, Ю. П.* Результатив, пассив и перфект в русском языке // Типология результативных конструкций. Л. 1983.
- Ломтев 1956 — *Ломтев, Т. П.* Очерк по историческому синтаксису русского языка. М. 1956.
- Маслов 1983 — *Маслов, Ю. С.* Результатив, перфект и глагольный вид // Типология результативных конструкций, Л.: Наука, 1983. с. 41—54.
- Маслов 2001 — *Маслов, Ю. С.* Очерки по аспектологии. Л. 1984.
- Маслов 2001 — *Маслов, Ю. С.* Перфектность // Теория функциональной грамматики: Введение. Аспектуальность. Временная локализованность. Таксис. 2-е изд., Эдиториал УРСС, Москва, 2001. с. 195—209.
- Недялков, Яхонтов 1983 — *Недялков В. Л., Яхонтов С. Е.* Типология результативных конструкций. Л. 1983.
- Падучева 2004 — *Падучева, Е. В.* Динамические модели в семантике лексики. М. 2004.
- Пупынин 1991 — *Пупынин, Ю. А.* Активность/пассивность во взаимосвязях с другими функционально-семантическими полями // Теория функциональной грамматики:

- Персональность. Залоговость. СПб: Наука, 1991. С. 211—238.
- Русская грамматика 1980 — Русская грамматика. 1980. М.: Наука. (<http://rusgram.narod.ru/>よりアクセス, 2012年6月採取)
- Холодович 1979 — *Холодович, А. А.* Проблемы грамматической теории. Л.: Наука, 1979.
- Храковский 1974 — *Храковский, В. С.* Пассивные конструкции // Типология пассивных конструкций. Диатезы и залого. Л.: Наука, 1974. С. 5—46.
- Храковский 1981 — *Храковский, В. С.* Диатеза и референтность // Залоговые конструкции в разноструктурных языках. 1981. Л.
- Храковский 1991 — *Храковский, В. С.* Пассивные конструкции // Теория функциональной грамматики: Персональность. Залоговость. СПб: Наука, 1991. С. 141—180.
- Шахматов 1941 — *Шахматов, А. А.* Синтаксис русского языка. Л., 1941.
- Шелякин 1989 — *Шелякин, М. А.* Современный русский язык. М.: Русский язык, 1989. с. 194—207.
- Chrakovskij 1976 — *Chrakovskij, V. S.* Zur Definition von Passivkonstruktionen // Satzstruktur und Genus verbi. Akademie-Verlag, Berlin. 1976. pp. 51–62.
- Comrie 1979 — *Comrie, B.* Aspect. Cambridge: Cambridge University Press. 1976. (山田小枝訳『アスペクト』むぎ書房, 1988.)
- Dobrev 1982 — *Dobrev, I. D.* Starob"lgarska grammatika: Teorija na osnovite, Sofija. 1982. (石田修一訳『古代ブルガリア文法 (語幹論)』大阪外国語大学学術研究双書 8)
- Khrakovsky 1979 — *Khrakovsky, V. S.* Diathesis // Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae, Tomus 29 (3–4), 1979. pp. 289–307. (Available online at <http://real-j.mtak.hu/832/>, Accessed on 2015-11-21.)
- Siewierska 2013 — *Siewierska, A.* 2013. Passive Constructions. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) The World Atlas of Language Structures Online. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. 2013. (Available online at <http://wals.info/chapter/107>, Accessed on 2016-12-07.)
- 石田 1996 — 石田 修一『ロシア語の歴史』吾妻書房, 1996.
- 石田 1998 — 石田 修一「内容類型学と個別言語学の接点—最近の研究に見るロシア語「態」の研究—」『ロシア・東欧研究』第2号, 1998.
- 石田 2007 — 石田 修一『ロシア語の歴史——歴史統語論——』ブイツーソリューション, 2007.

- 工藤 1995 — 工藤 真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房, 1995.
- 栗原 1981 — 栗原 成郎「ロシア語動詞の統辞論的研究」『Rusistika : 東京大学文学部露文研究室年報』東京大学文学部ロシア文学研究室, 第 1 号, 1981, pp. 1-35. (URL: <http://hdl.handle.net/2261/4101>, 取得日: 2014 年 5 月 9 日)
- 研究社露和辞典 1988 — 研究社露和辞典『研究社露和辞典』研究社, 1988.
- 高津 1954 — 高津春繁『印欧語比較文法』岩波書店, 1954.
- 高津 1960 — 高津春繁(こうづはるしげ)『ギリシア語文法』岩波書店, 1960.
- 砂川 2005 — 砂川 有里子『文法と談話の接点——日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版, 2005.
- 東郷 1994 — 東郷 雄二「受動態と非人称の transitivity system——日仏対照研究へ向けて——」『日仏対照研究論集』日仏語対照研究会, 1994, pp. 288-306.
- 高見 2011 — 高見 健一『受身と使役——その意味規則を探る——』開拓社, 2011.
- 林田 1999 — 林田 理恵「ロシア語受動構文の意味と機能」『ロシア・東欧研究』第 3 号, 1999, pp. 103-142.
- 林田 2000 — 林田 理恵「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について——(3) 受動構文」『大阪外国語大学論集』第 22 号, pp. 15-53.
- 林田 2001 — 林田 理恵「ロシア語受動構文と不定人称文」『ロシア東欧研究』第 5 号, 2001, pp. 71-117.
- 林田 2005 — 林田 理恵「第 3 部ロシア語のヴォイス」『ロシア語のアスペクトとヴォイス——ことばの生成と解体の場で——』博士論文(神戸市外国語大学), 2005.
- 林田 2007 — 林田 理恵『ロシア語のアスペクト』南雲堂フェニックス, 2007.
- 林田 2011 — 林田 理恵「ロシア語の受け身が描く世界——主語と動作主項をめぐる——」『大阪大学世界言語研究センター論集』第 6 号, 2011, pp. 37-56.
- 林田 2013 — 林田 理恵「ロシア語の受け身が描く世界——再帰動詞による受動とは——」『言語文化研究』第 39 号, 2013, pp. 75-93.
- 細江 1928 — 「我が国語の動詞の相 (Voice) を論じ, 動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀会, 1928.
- メイナード 1997 — メイナード, 泉子・K.『談話分析の可能性』くろしお出版, 1997.
- 山口 1995 — 山口 巖『類型学序説——ロシア・ソヴェト言語学の貢献』京都大学学術出版会,

1995.

山口 1998 — 山口 巖「スラヴ語における非人称受動表現」『ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文』1998, pp. 302-318.

山口 2005 — 山口 巖「ロシア文法の周辺 : 一般言語学への招待」『古代ロシア研究』日本古代ロシア研究会, 特別号, 2005. (URL: <http://hdl.handle.net/2433/65738>, 取得日 : 2011年7月20日)

鷲尾 1997 — 鷲尾 龍一「他動性とヴォイスの体系」『ヴォイスとアスペクト』研究社出版, 1997.

例文出典

«Белое облако» — *Айтматов, Ч. Т.* Белое облако Чингисхана. Повесть к роману // Знамя. 1990. № 8. С. 7—57. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 25.02.2002. Режим доступа: <http://www.lib.ru/PROZA/AJTMATOW/oblako.txt> (дата обращения: 06.09.2010).

(Айтматов, Ч. Т. 飯田 規和 <訳> 『チンギス・ハンの白い雲』 潮出版社, 1991.)

«Джамиля» — *Айтматов, Ч. Т.* Джамиля // Первый учитель. Повести (Перевод с киргизского А. Дмитриевой). Киев: Изд-во детской литературы «Веселка», 1976. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 08.06.2003. Режим доступа: <http://www.lib.ru/PROZA/AJTMATOW/jamila.txt> (дата обращения: 06.09.2010).

(Айтматов, Ч. Т. 佐野 朝子 <訳> 「ジャミリヤー」 『キルギスの青い空』 フォア文庫, 1982.)

«Первый учитель» — *Айтматов, Ч. Т.* Первый учитель // Первый учитель. Повести (Перевод с киргизского автора и А. Дмитриевой). Киев: Изд-во детской литературы «Веселка», 1976. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 08.06.2003. Режим доступа: <http://www.lib.ru/PROZA/AJTMATOW/uchitel.txt> (дата обращения: 06.09.2010).

(Айтматов, Ч. Т. 佐野 朝子 <訳> 「最初の先生」 『キルギスの青い空』 フォア文庫, 1982.)

«Белая гвардия» — *Булгаков, М. А.* Белая гвардия. Москва: Правда, 1989. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 04.10.2000. Режим доступа: <http://www.lib.ru/BULGAKOW/whtguard.txt> (дата обращения: 06.09.2010).

(Булгаков, М. А. 中田 甫・浅川 彰三 <訳> 『白衛軍』 群像社, 1993.)

«Мастер и Маргарита» — *Булгаков, М. А.* Мастер и Маргарита. Москва, 1984. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 07.12.2000. Режим доступа: <http://www.lib.ru/BULGAKOW/master.txt> (дата обращения: 06.09.2010).

(Булгаков, М. А. 水野 忠夫 <訳> 『巨匠とマルガリータ』 河出書房新社, 2008.)

«Кафедра» — *Грекова, И.* Кафедра. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 21.02.2003. Режим доступа:

<http://www.lib.ru/PROZA/GREKOWA/kafedra.txt> (дата обращения: 06.09.2010).

(グレーコワ, I. 前田 勇 <訳> 『大学教師』 群像社, 1988.)

«Убийца поневоле» — *Маринина, А. Б.* Убийца поневоле. Москва: Эксмо, 2008. 320 с.
[Электронный ресурс] Электронная Библиотека LoveRead.ec. Дата обновления:
06.11.2015. Режим доступа: http://loveread.ec/view_global.php?id=2728 (дата обращения:
20.08.2016).

(Маринина, А. В. 吉岡 ゆき <訳> 『孤独な殺人者』 作品社, 2000.)

«Похождения Шипова» — *Окуджава, Б. Ш.* Похождения Шипова, или Старинный водевиль
// Приложение к журналу «Дружба народов». Москва: Изд-во «Известия Советов
народных депутатов СССР», 1979. 512 с. с илл. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека
Максима Мошкова. Дата обновления: 11.12.2004. Режим доступа:
<http://www.lib.ru/PROZA/OKUDZHAWA/shipov.txt> (дата обращения: 15.09.2010).

(Окуджава, В. Sh. 沼野 充義・沼野 恭子 <共訳> 『シーポフの冒険,あるいは今は昔の
ボードビル』 群像社, 1989.)

«Деньги для Марии» — *Распутин, В. Г.* Деньги для Марии. [Электронный ресурс] Lib.Ru:
Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 21.04.2002. — Режим доступа:
<http://www.lib.ru/PROZA/RASPUTIN/dengi.txt> (дата обращения: 14.09.2010).

(Распутин, V. G. 安岡 治子 <訳> 『マリヤのための金』 群像社, 1984.)

(2016年12月15日現在,一部の作品について閲覧ができなくなっているため注意が必要である.)

博士学位論文に誤りがございました。正誤表のとおり訂正し、お詫び申し上げます。

正誤表

訂正箇所		訂正内容	
ページ	行	誤	正
日本語要旨 p. 2	1	論文は、二部、六章の構成となっている	論文は、二部、六章の構成となっている。
外国語要旨	19-20	..., с помощью современной русской литературы.	... по материалам произведений современной русской литературы.
目次 p. 1	13	1.3 まとめ.....18	削除
目次 p. 2	1	4.1.8 林田（2001, 2011, 2013）30	4.1.8 林田（2001, 2011, 2013）31
p. 11 追加	18-20		Ob ^{ag} （objectum, agens 動作主客体）
p. 15	20-22	さらにこれまでほとんど考察されてこなかった受身文と不定人称文の差異化原理および受身文と OVS 能動文の差異化原理を明らかにすることを試みている。	さらに第 5 章においてはこれまでほとんど考察されてこなかった分詞形受動文と不定人称文の差異化原理を明らかにすることを試みている。
p. 24	29	マホガミー製	マホガニー製
p. 27	10	研究社	研究者
p. 27 脚注	1	ニジャルコフ・ヤホントフ	ニジャルコフとヤホントフ
p. 27 脚注	6	ニジャルコフ・ヤホントフ	ニジャルコフとヤホントフ
p. 28	15	研究社	研究者
p. 28	16	Маслов（1987）	Маслов（2001）
p. 71	18	分詞形受動文	再帰形受動文

p. 72	4	分詞形受動文	再帰形受動文
参考文献 p. 79	22	Маслов 2001	Маслов 1984
参考文献 p. 80	16	Comrie 1979	Comrie 1976
参考文献 p. 80	18-19	Dobrev 1982 — Dobrev, I. D. Starob"lgarska grammatika: Teorija na osnovite, Sofija. 1982. (石田修一訳『古代ブルガリア文法(語幹論)』大阪外国語大学学術研究双書 8)	ドブレフ 1993 — Добрев, И. Д. Старобългарска граматика: теория на основите. 1982. (石田修一訳『古代ブルガリア語文法: 語幹論』大阪外国語大学学術研究双書 8, 1993.)
参考文献 p. 81	27-28	細江 1928 — 「我が国語の動詞の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀会, 1928.	細江 1928 — 細江 逸記「我が國語の動詞の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀會, 1928.
参考文献 追加			Бенвенист 1974 — Бенвенист, Э. Общая лингвистика. М.: Прогресс. 1974. (岸本通夫監訳, 河村正夫訳他『一般言語学の諸問題』みすず書房, 1983.)
参考文献 追加			クリモフ 1999 — Климов, Г. А. Типология языков активного строя. М., 1977. (石田修一訳『新しい言語類型学: 活格構造言語とは何か』三省堂, 1999.)
参考文献 追加			中山 2007 — 中山 恒夫『古典ラテン語文典』白水社, 2007.
参考文献 追加			松川 1971 — 松川 秀郎「受動態表現における-ся 動詞」『神戸外大論叢』第 22 卷, 1971, pp. 1-17.
例文出典 追加			«Альтист Данилов» — Орлов, В. В. Альтист Данилов. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 19.06.1998. — Режим доступа:

			<p>http://www.lib.ru/PROZA/ORLOW_O/altist.txt (дата обращения: 06.09.2010).</p> <p>(オルローフ, V. V. 秋元 里予 <訳>『ヴィオラ弾きのダニーロフ』群像社, 1992.)</p>
例文出典追加			<p>«Свой круг» — <i>Петрушевская, Л. С.</i> Свой круг // Дом девушек: Рассказы и повести. М.: Вагриус, 1999. 446 с. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 07.10.2003. — Режим доступа: http://www.lib.ru/PROZA/PETRUSHEVSKAYA/swoj_krug.txt (дата обращения: 06.09.2010).</p> <p>(Петрушевская, Л. С. 沼野 恭子 <訳>「身内」『魔女たちの饗宴』新潮社, 1998.)</p>
例文出典追加			<p>«Ночь» — <i>Толстая, Т. Н.</i> Ночь. [Электронный ресурс] Lib.Ru: Библиотека Максима Мошкова. Дата обновления: 25.03.2001. — Режим доступа: http://www.lib.ru/PROZA/TOLSTAYA/noch.txt (дата обращения: 06.09.2010).</p> <p>(Толстая, Т. Н. 沼野 恭子 <訳>「夜」『魔女たちの饗宴』新潮社, 1998.)</p>

以上